

中田光子氏蔵『古今和歌東家極秘』翻刻

酒井茂幸

はじめに

本稿で翻刻した、中田光子氏蔵『古今和歌東家極秘』（以下『古今和歌東家極秘』と略称）は、東常縁やその近親者である頼常・素純らが関係する東家流の古今伝受の切紙・伝授書の集成である。井上宗雄「室町期和歌資料の翻刻と解説―「堯尋三十三回忌追善和歌」・日吉社壇詠二十一首和歌・和歌秘伝書・古今和歌東家極秘」〔調査研究報告〕第五号、一九八四・五）により初めて学界に紹介された。常縁から宗祇へ宗祇から実隆へと伝受された切紙の本文が伝わらない現状では、室町中期の古今伝受の切紙の古態・原型を示唆する注目すべき資料である。宮内庁書陵部蔵『古今秘伝集』所収本（五二―一七）三五冊所収と（鷹―三八〇）一二冊所収の二本あり。前者は荷田春満相伝原本とされると本文の掲出の順序が一箇所異なるだけで全く一致し、諸伝本が存在する『古今和歌集見聞愚記抄』の一本として整理されるべきものである。なお、これらの諸本がいずれも江戸中期から後期の書写であるのに対し、『古今和歌東家極秘』は江戸極初期写と認められ、資料的価値がある。

翻刻に際しては、漢字・仮名の別、仮名遣・傍書・割注・小字等は原文のままとしたが、通読の便を図るため以下のような処置を施している。

- 1 旧字・異体字はおおむね常用漢字に改めた。
- 2 最小限の読点・中黒を付した。
- 3 原文の誤写のため意味が通じない箇所には、右傍に（ママ）とした。また、不自然な空白には（アキママ）と記した。その他私注は全て（ ）で表記した。
- 4 半丁の改丁を「で表し丁数と表・裏を行間に「1オ」「1ウ」の如く略掲した。

古今和歌東家極秘（外題・題簽）

身清 △△

菓実 △

影像 へ

（二分空白）

一律和声、神代歌舞律声也、天与同漢根本呂声也、一三人作者 津国

石見乎

一住吉岸 忘草 征講

一隔句といふ事、読方秘事也、口伝云、梅か枝にきめる鶯春かけてなけともいまた雪はふりつゝ、此哥きある鶯^ウなけともとつゝくへき

*さかい・しげゆき

埼玉大学非常勤講師

にて、春かけてと句をへたて、中に入るは隔句也、余可准之、隔句をしらてハ哥不可読と云々

一正 住吉大明神
玉津嶋大明神

(一行分空白)

文明十年五月廿一日 壬午 申刻常縁口伝之分

(一行分空白)

一師弟之間に文台あり、師ハ西に向香をたきて心をすまして外伝仰

(一行分空白)

ちはやふる我心よりなすわさをいつれの神かよそにみるへき」コオ

我心といふは天照大神の御心也、此ころをいへは無事也、されハ此ころに住するころは、今日の人のころも神のころも同、よりていつれの神かよそにみるへきといへり、此觀に住して喝する事三返也

一をか玉の事、うは玉・玉ほこなといふに同シ、君に奉る所の鳥柴なれハほむる心也、奥義を用鳥柴の事うつゝひはりなとハ、荻萩などの枝につく御狩事、禁中のまつり事のかひまにハ、又万民の望をもこととはり給はんため也、是神の和光の義也

一めとにけつり花の事 中宮の御座所の妻戸の事也、けつるとハ事をなす事也、花といふハ万木の時節」の機に和して、色を生ずる初の心也、諸のまつり事をなし、此所にてころをやすめ給心なり、前の義を用 アツクミ 手継と読なり

一河名草の事、末の義を用、河骨ハ水の性也、万事ハ水の器に随かことし、諸のことをなし、そてハ此本源の心に住すへき也、あをみとりとてかね筆の様なる水の底の草といふ義、またをもたかといふ

義あり、なりハをもたかに似て、黄なる花のさく草也

一をか玉の木ハ内侍所なり、鏡の事也

一河名草 宝剣也、此剣に則まう念おこらさる也、多てやむにハあらず、物にけはくせられぬころを此剣と心」得也コオ

一妻戸 神璽也、しるしの玉と号、御神素戔鳴尊と和し給へりし所の義也

一よふこ鳥の事、はやこくはつこくよふ也、春の山野奥の義を用、素明法師の御聞書にハ郡上多き鳥也とあり、のこりの鳥の義あらは也

一風躰の口伝の哥、是に准して正風躰を知へき也

一天雅彦、崩とよむ喪屋とハはふりする所の義也、心ハあめわかひこ天上より下界守護のために、御神より天のかこゆみあまのはやを給て下界にくたり、下照姫に心をうつし程へけれハ、御神心もとなからせ給て、無名きしと」云鳥をつかハし給へり、此鳥くたりて二人のおはする所の程近きゆつの木の枝にありけるを、下照姫化鳥ありとておち給へハ、この男神あまのかこ弓にてみ給へハ、鳥はその所にして死、その矢天上にあかり、御神のまへにおつ、御神さてハ下界に事いてきたり、我にてきせんのものにあたれ、とてなけ給へハ、男女の神ひるねし給へるそのあめわかひこのむねに立て死給へり、死せんとて天にしてはうふるへきよし云によりて、於天上喪す

もかりと云ハ、ちういんをつくす心也、両首の哥ハ有注、又下照姫の事はたへ照かやきうつくしかりし也、そとおり姫等には同又此哥於天上御神等の御哥にあらさるを、天にして姫」の哥に用事此界の道を立る所の肝心也、天地の哥ハ如此也、是古の義也、人の哥を

ハ古今にゆつりてあけず、これよりを今にあつ、正と直とのこの心
歟、古今のことはりあきらか也

一ほの／＼の哥の事委みえたり、大方五躰分離して又本源にかへり、
此界に隔る心也、ほの／＼とあかしハ、一機生してより、六根六穢
を具足して、又本に帰るさかみを浦といへり、一天四界をたな心の
中なる帝王も、如此なりと万民思心なり、生老病死の四魔の義不用
と云

一古哥事、御神の御哥也、いつくしき御かほにて、もろ／＼^{ウツ}の心を
見給て、みたらとなす志ハかきりあらし、大慈大照深重の心也、
和してむかひ給はねハ、ちかつき奉る物のなれば、いつくしきみ
かほにてといへり、是を仏出世してハ慈眼視衆生福衆海無量

一身仁邪奈久他耳慈乎与 是古哥の注也、心ハ我は穢をみたらすして
他をあはれむ心なり

一今上皇帝 延喜御門の御事也、神南日能哥をさつけ奉るに、又自哥
をと仰あれハ、桜花の哥を奉る也、上の字を奉ると読也、此両首又
古哥に同

文明十年五月廿五日^{丙戌}午刻相伝、為家卿素暹法師に伝受の儀号家説
各々作之旨と云^{五才}

一稽古方 哥道を稽古の義也、方とハ四方四角なる様に稽古のみちの
はう也、驚ハ法度のはうの時ハ法也、用之

一情新とハ此心はしめの心也、青色ハ春也、是年中の初也、春ハ又自
東来る、是又初也、月よ花よと点する心の初なり、新の字又物とに
転する心也

一心直とハ此心ハ未分の心はたらかぬ心也、此心に情のあやをなすな

り

一詞旧とハ三代集以来後拾遺等までの詞を用、彼等に詠ならハしたる
詞の事也

一言艶とハ舟と云斗に、海波にうかふ・わたるなと様の事也^{ウツ}「たとへ三
代集等の詞なりと云とも、へらなりなどの類にあらず、聞やすくな
たらかなる詞をよめと云事也、詞旧と云に艶の字あやをなす也、相
伝の次第如此也、心を得事をいは、堯^{ウツ}教^{ウツ}法印をも書可入なれと、
家の義を立によりてと云

一再稽ハ前の心を往する義也、心を新とて西より東へ月日の行なとい
はんハ、あたらしきにあらず、心ハはたらかすして風情のめくれる
さまによりてあたらしきみゆる也、くハしく吟味して可得其心也

一心を染古風とハ、たゝちにはたらかぬ正の心に住すへき也、詞を先
達にならへとハ、三代集等のやさしき詞をまなふ義也^{ウツ}「心をたゝし
くとハ無事心也、詞をすなほにとハ、古人の仕付たる中にも、艶に
やさしき詞にて哥をよめと也

一心を物にまかせてとハ、題を取てハ其題に能と心の遍なるよし也、
物に対して事なきを正と云ハ、大に和する心なり、未分の心空居也、
好所ありては物とに和する心なるへし、仏法にハれき／＼^{ウツ}「そうたい
したる上をさゝえて空とみる也、道にハ月よ花よと心を伝、つゐに
霜に落付取の心を空と云なり、爰を正と云、此心を、世中を思ひ／
＼てつく／＼とみて心なき窓のくれ竹

一その初を思へハ、かゝるへくなんあらぬ昔ハ、人の心をかくさす各
と此たゝち^{ウツ}にありけるか、人の心れつになりたるにより「心をあら
ハす物なけれハ、哥を奉しめて人の賢愚をしるしめしけると也、以

是人の心を斗事と也たれば、此道の零落といへり、上古聖代をその初を思へハといへり

一百人一首の事此外も此類の作者あるへし、天下の人の心得をやみて、定家さかの山荘にをされける色紙の哥也、此百首を土台として、新勅撰を撰給へり、大方に此書を不可思也、古今を始終をうつつして撰といへとも、猶花のみ多分ならんと云り、巻頭ハ古の字にあつ、哥の心かくれたる所なく、花実を兼たれば、よりに正の字に用、巻軸も同けれど、ふるき軒はのしのふにもあまりたる昔などといへる詞、心の花すきたる也、故に直^{ナオ}の字にあつ、よりに今の字にあつる也、二神のあなうれし乙女にあひぬとよめりし二首を、正の字にあつれハ、百人一首直にあたる也、又天地未分を正とみれハ、二神の御詠直と用

一代と勅撰の内、題不知の事初によらずして、しかも其心面白義あらは、なるをもつての義也、是を正直の哥と心得へし、未の二の義又其旨あらは也、大旨前の義叶正理なり

一うら書先人私に加之給ふ、後学のためと云々

一序の詞その心あらは也、俗心を休せんかために、和哥詠とハ哥心の外なる心を俗心と云、仏に對して衆生と^{アウ}云かことし、又眼の躰と云哥、皆人のしりかほにしてしらぬ哉、必しぬる習ありとハ、是等の哥也、心に起ことを哥によめハ、その心を散す是道の修行也、委書頭せり

一一句の文の事、清の一句より六義を立、よりに一句の文と云

白くあきらけき神達をのくおもひたまへ告

此くこの時にきよくいさきよき事あり教

法くもろくの法ハ影と形のことし持^{私法にあらず、法義の法式を云也}

清くきよくいさきよき物ハ、かりそめにもけかるゝ事なし直取く心をとらハうへからす正 深空と云、深空ハ不居の心也

皆くみな花よりなれる、このみはとハのたまはさる也合

花の咲てハ必実のなる様の事にハ不有、自然と具し^{オウ}たる心と云心也、猶別昏ニあり、此六通の外ハ加追之と云と、前も初六通と云と

文明十年六月五日乙未午刻

一文武人丸、立田河の哥也、此両首也、つみに云はてぬ哥也、此哥を土台として此集を撰と云と、貫之か撰の所の此義本意歟、奥の義又尤也

一をか玉の木の事 榊也、是神の性也、これを御正躰と号、其旨明也、巨細口伝也

一めと挿 さしはさむとよめり、委く前^{オウ}にいへり、後の義を用、花をむすひたるをも、けつるといへり、ことをなす事也^{オウ}

一河名草の事 如前をもたかと云説よろしきにや

一内侍所とハ御神の此界にとめ給ふ鏡也、是をさかきの事とも云、是天心さうくとしてはかりかたき躰也、鏡の事をうたひにも当時云へり、其詞万鏡をうつしなから、しかも一物をたくはへすと云と、けんすればけんし、真又真

一しるしのはこ事、此玉のあらんかきりハ大ろく天の魔不可来と云て、まもる所の法度也

一宝劍の事 治天下付詞也付詞也、同前之義宝劍此機をもつて天下を

治す、此機大和也、この機におそるゝにハあらず、此義に對してお

こらさる也、玄といふは極意なり、遠の字ハかきりあるとをき也、

ようをんの遠^{9オ}」

一姪名負鳥 和合の初なれば、帝にたとふ、王ハ万民の源といたゞく所なれば也、秋ハ年中のおとろへ行きかひ也、王又零落の道をおこす所、是帝心也、よりて秋の部にいるゞ也

一喚子鳥事 時節を得て人につけをしうる心を関白といへり、帝心を性として時節に応する下地の心也、當時も彼所の会などに、武家の懐紙には詠応教とあり

一 百千島的事 関白の教を聞て各々事をなすかことく、春来ハ教鳥さへつると云心也

一 賀茂祭哥の事 延喜の御父寛平の帝たゞ人にて^{9ウ}「おはせし時、老翁来て望のありといへり、子細をとひ給へは、かもの祭絶たるを再興し給へと云り、たゞ人の於御身不可叶とあれハ、只領納たゞもあらずと云、さらはとて尤の由いへりてつみに位に付給て、御狩に出給し時、老翁来て此事をいへりしに、応して此祭を取おこなひ給し、以御徳引来て延喜聖代と仰候ゆへに、此哥を廿の巻よりも奥に入れて巻軸とす、不可説云々

一 号題の事 天照大神の御正躰と云此うら書也、是を天心とし無事とも和とも云、此外の道の極意あらんや、是を万物の根源と云々
一 阿古子^{アコゴ} 貫之女ノ名也 延長元年四月八日に自貫之伝^{10オ}「て後前にみ所の種

との義を一冊にして、我ことくなる機のなければ、口伝の旨を高記と号授よしを又一通書未記と号して、めのと子に授之、其人又めのと子に伝之、此人大津三井寺の辺に侍る時に、基俊此道を祈石山に籠給へるに、やせたる女人の夢中に来て、我ハ志賀の辺にあり、^{巻也}この書を与る也、我うへて侍る也、物をあたへ給へとて帰ると思へ

は、夢覚ぬ、さて大津に行志賀の辺にて、夢想のことくなる女にあひて、このことハりをのへて相伝して、そのめの子の奥書也、志賀の浜に鳥ゐのあるは、貫之神云々、於此所の事也、大津大明神の事也、哥の心能と吟味あるへき也、哥ハたゞはかなくよむかよ^{10ウ}きとて、物ともに此事を定家返といへり、伊勢か哥などこゝをのみよめれハ、定家猶執し給へりと云々

一 紀氏女^{名阿古子也} 左金吾基俊 五条三品俊成卿 黄門^{定家} 中院^{為家}

一 授哥の事 親の哥、疎の哥とてあり

桜花それともみえずと云て、久かたとつゞくは疎なり、ほのくくといひて、あかしとつゞけるハ親句の哥也、是等此類也、心にきて親句・疎句と云説ある歟

一 氏数の御詠ハ思ひ入なんといいひて、木の葉ちるとつゞける詞乱句也、されと心ハ親たるへき歟、又相続の義如何、是疎句の哥なり^{11オ}

一 古今題号の事、うち聞えハ続万葉と書たれとも、貫之以意趣古今と号、撰する時代よりこの方をさして今と心うる義也、後撰・拾遺ハ序を古今にゆつるのちにひろふと云心、又古今と心うる也、三代集の事日月星の三にあつと云々

文明十年六月十五日 午剋

一 号題の事、一部の極是也、号題口伝手印と号、是をゆるして後、秘と云てはゞかる事あるへからず

神古 我今

源を汲て流をなすと云義也、天神七代をハのそく、一部ハ此二字の間^{11ウ}の事なり

一手つきの事、人丸より貫之へつるその間、はるかにへたゞるといへ

とも、その性を伝る義也、其類多し

一めのとこの基俊に対して、其機に当ならハ、しるしあるへしとてくすしゆひを同ゆひにくらふと云々、大津明神のあたりにての事なればハ、此明神を貫之といへり、如何しらひけの明神と号

一口伝の目録

一土台の事 文武・人丸兩首の和哥もつて土台とし、古今の二字の義をまうく、巻頭より始て千余首ハ心・風情・景氣の三による也、惣而物語等を作する事、此心当あり、万葉の比までハ、人の心自然と聖代の^{12オ}「心也、此集以来道をたつる事ハ、くたれる心の教戒の義にて道をたつる事也

一卷頭の事、哥の心こそにも今年にもおとし付す、世俗の道理も一に落付ハれつなる義なり、幽玄も余情もともに叶て、去年今年と云を古今の二字にもあつる也、又此哥神代以来万葉にもひとしく今より末に人のまねはんにもよかるへしと也

一恋部五巻の事 五躰を具すれハ此心あり、又心あればや、無事と云物にあらず、こゝを人の世にあつて無為なる事不審といへり、恋と云事諸事につひて有之義也^{12ウ}

一みたりのおきなの事 身足と書也、翁ハ者に長すると云義也、是を高貴大明神と号住吉也、此御神化して号、人丸と黒主等三人を挙て云義、俗心也、身足ハ於身満足円満の義也、翁ハ長したる義也

一物名の事、神代に悪敵をたいらくる義也、人物未定と云何物にかあらん、人物その初物と云心をもつて物名と号、あしかいのことくと云ハ物の初也、道之為道常非道名之為常非名と云々、はかりかたき所を鬼神もおそるゝと云々、十巻めに置事ハ調心也、成就八十

をきはとするなり

一誹諧の事 史記のこつけい伝と云段にあたれる也、^{13オ}「東方朔と云者見物の時、俄に雨のふりけるに、東方朔かいたりてせいちいさかりけるに、せいひきき徳ハ雨にをそくあたると云されたるを、人とわらひのゝしりける、是を帝王の聞給て、そこはくの人を家の内に入て雨にぬれさりし、其心能あたれりと云々、されハみたるやうなれと、身法をおさむへき事の深心を立たり、くたれる機をかみて、彼躰の方より引入とする義也、唐の古事を挙て云ハ、この道の本意にあらず、自然とあたれる義なれハ、指南とする也

一卷軸の事 此哥賀茂の祭の事をよめり、寛平法皇の昔親王よりたゝ人に成て、王侍従と申せしか、^{13ウ}「有時老翁一人来て難去憑入へきよしを云、しるて云ければともかくもと返事す、然者近年絶たる賀茂の祭を執行給へ、領納あらは事成就といへり、さ侍らハ尤のよし答へ給ひて、さて幾程なく位につき給へり、終に此哥又告有てほいのことく祭を再興給へる事、誠神に通せる其徳をもつて延喜聖代仰給ふ事のゆへに、此哥を軸に置也

一印咒の口伝の事 外伝の印也、調¹⁴ハ納¹⁴タルすかた也、此兩手をひらけハ、法界万物となり頭たる心なり、咒と云ハ御神の御哥也

千早振吾心よりなすわさをいつれの神かよそにみるへき^{14オ}是を知り覚^レは、誠の道にかなへり、われハいのらすとて、神ハまもらんといへり、無事にして物に随、これを神とも和とも云也、されはいつれの神かよそにみるへきといへり、極是の義也なり、魔のかさぬましなひ也

印咒の事 身足の事

堯孝法印六日世去、四日に伝受畢と云、

一梅花地それとも見えす久かたの天

御影に梅の花のみんなを、三書ハ此義なり、一はたゝみの上にある也、

置所もいさゝか此あつかひ有へし

一黄門の奥書に不可存、自他の差別志同可随之と云々、和の一時を土台としてかけり14ウ

一名題の事、又云真躰鏡也、物けんすれば、今けんせねハ古にあつる也、以之古今の二字 をまうく秘之云々

一道の事、千金をになふと不伝之、千金不与可伝之と云

一序云岳谷にうつりてかゝやく 賢愚共二明白成由なり

一長哥の事 延喜御製也、口伝

えふの身なれば、定家云、大要の身なればといふ心此義面白、惣而長哥と云事、猶万葉長哥を面とするか故に、卅一字の哥をハ返哥と号、惣躰をゆつるゆへに、長哥ともいはす、されは於古今ハ卅一字の哥をもつて面とするにより、其沙汰に不及、短哥15オと号、みしかき句の内にして心のきこゆれハ、短哥と云義広談義の時なれハ、正理を秘義也、万葉等の比ハ免補と兼として道そなはれハ、別而をこなふと云事もなし、生死又自然として無苦、神の代よりこなたへ心分別あり、道れつなるにより、此集を道の眼目とし、終人の鐘となす也、

仍此名をまうけ、此義を得也

(四行分空白)15ウ

古今和歌集見聞愚記抄

一やまとうたハ人の心をたねとして、よろつこのことのはとそなれるける といふハ題同の詞なり 世中にある人といふより哥の義ハ立

也 人の心をたねとするといふ人の心肝心大事なり、見聞に落たる

心にハあらず、見聞におつる心ハ、一にむすほゝれて悪に及ぼす事なし、されは善悪に落ぬ、心一切の根源となる也、是則天真也、此

国は天真をもつて種として、万根源となる心也、異国も其理侍へけ

れと、ことに我朝ハ天照大神の御すゑ世をたち給ひて、天真をたかへ給ハぬ君なれば、かくいへる也、又仏法にも此人の心といふ事思ふへくや16オ

一卷頭の哥有両義 一にハ古今の義、一にハ物々の上をもつて知事也、

これも古今のことハリなるへし

一やまと舞の文字の事可尋之、只其心を思さとるへし、理の説此国ふり也、哥人可思処也

一人の好所これ常の事也、殊に哥道に在之、所好をはなるゝハ此集也、

能と可守此理、以此心集をみれば、正位に叶とそ尤可仰之

一真言家に七百余尊とたつれと、つゝむる所はたゝ両部也、両部ハ内外也、猶いたりてハ阿子の一也、されとも五百余尊・七百余尊とい

ふかことく、此集もたゝ古今の二字に千首の理納まる也、いひのふれハ千首なり、16ウ古今の二字も又つゝむれハ、王道の一也、王道ハ我

国の眼事也、王道と云ハ是天照大神の御心なり

一此集に始末とたつる事在此

年のうちによしや世中 御家にハ又ちはやふるの哥也、是ハ徳を本としてたつる義也、徳のいたる所道の立する心也、法印の義又其旨

肝心とそ、これ口伝ことなる事ハなし

一短冊を花に付る事 二におりて三にたゝみて、一番の枝に結び付へしとそ、是ハ此集聴書のうちの物語なりしかハ書之、集の用にハあ

らぬ事也、惣して此愚抄にハ次第をわかす書之、其故ハ時をさため
すして、惣の「聴書の外に永置事なれば、たゞそのまゝの義なり、
此内口伝に又前後不同あり、然者只其まゝの所を伝受の証とすへき
心也

一 風躰の事 風とハ世界の風俗也、治レル世の声ハ安以テ楽ニナントスル世
の聲ハ恨以テ怒レリといへり、安するとハすなをなる心也、たのしむ
とハウたかハしき事のなき也、恨てとハ姿のうらひれて閑なる所の
なき也、たしかになきをいふ也、怒とハしかもすくよかなる所過た
る躰也、義ハたしかならずして、姿ハこはくしきを云也、人のさ
まにおなしかるへし、未來記の句のつゞき、又雨中吟の哥にてこと
に風躰をハ思ひさとるへし」

一 風躰のいまくしき侍る事あり、吉野山花の古郷跡たえてむなしき
枝に春風そ吹、是ハ当座の判にはいかにもほめられたる也、其折の
時宜なるへし、哥ハ誠に面白き哥なれば也、これ亡国の姿也とそ、
詞ハ取分ていまくしき事も侍らねと、いひつゞけて吟したる亡国
の姿侍る也、又世中のくたりはてぬといふのみやたまく人のまこ
となるらん、是も原作者の御哥也、されと是ハ風躰あしからず、風
躰はたゞはしやきて、しかもしるのあるやうなるかよき也、されと
も物ふとくして、はしやきたるハわるき也、たとへは松なども、か
こくとして、さるからしつかにさひしきハよろしき也、貧相なる
姿あるハわるし、又薄ハ「もとよりさひしき物なれと、雨などにあ
ひて物むつかしくみたれふしたるなどハあしき也、何となくさひし
くもやさしくもみえて、露にみたれ風になひくなどハ、面白もあり、
又感もある也、俊成卿の述懐の百首、悉述懐なれハ、其内にいまい

ましきも侍るへきに、さもなくて哀ふかく、ことハリ殊勝なる事共
也、此百首にても工夫すへし、哥の大事ハ風躰也、風躰ハ十躰にわ
たるへし、能と思ひはからふへしとそ

一 俊成・定家就此道父子相違事有之、可思慮事非一歟

一身仁邪奈久 他仁慈乎与是も天子の御心なり、又人と此心を可守願
ハ公田ニ雨降り為ニ私ニ私トハ百姓の事也

一 又重之重 是を本始と云也、天照大神の心也、仏法にとれば心経也、
時照見五蘊皆空度一切苦厄五蘊の空を好知は、一切の苦を度するに
て侍也、是真実不虛の心也、されハ哥人の心は空居に持て、四時一
切変改に執をとむへからず、本姿といふによくもとつき観すへし、
此集の大悟也

一 住吉明神の御影に、かせつゑをつき、まことにくるしきさまに書事、
生死のかきり只今のよしをしめし給ふ心也、浮世のかなしみを思ふ
へき心也

一本姿と云事在之、事理に云也、事ハ哥面の姿也、尤「哥ハ姿肝心也、
理の姿自性也

一 後撰集ハ独立の集也、其故ハ万葉集・古今までは、知人稀なれば也、
後撰と云ハ古今より後の名にあらず、万葉の後撰と可心得、故ハ順
におほせて万葉を讀とかしめしより、万葉の心を此時えて古躰を本
とせり、されは後撰ハ詞のととのほらぬ哥おほし、心ハしかもゆう
に侍るなり、更に古今を放わたる集也、然者万葉の後撰と心得へし、
古来風躰に古今の後なれハ、後撰と名付るよし侍ハ相違とやらん、
かやうの事あまた侍れハ、亡父卿の作にあらずといへり、拾遺と云
ハ古今・後撰の残りをひろふにあらず、独立の集也、大道の残りを

ひろふ也」仍以往の哥多いれり、後撰を帯さると云ハ此義也、是尤面白義也、但又哥様の我執なり

一幽玄鉢といふを可得事、たとへハはるかなる露のに侍らん、柳又ハ一もと二本侍らん竹などのほのかにゆうくとみゆるやうにて、風などもさすかに吹にやとハみえて、しかも露もはれず、本すゑたとくしく柳や竹など、ハ心得らるゝやうならんとぞ、又空たきなどしたるねやなどに、のちに入て聞たらんに、はやたき物ともちんとも思ひわかぬか、さすかにかゝる物たきけんよとおほゆる、なきやうならんをゆうけむとハいふへきとぞ、此心もちてふるき哥をよくあんして、此哥のすかたかくやとおもふあらんを、廿度も」卅度も仰にもたつね、又さならぬ先達にもたつねて心得へしとぞ

(九行分空白)

古今和歌集の大事 素純

一をか玉の木の事 ウハカキ 三ヶ大事ノ内

をか玉の木の事 家との義まちくなり、あるか云帝御即位の時、みかさ山の松の枝を取て、長三寸斗五寸にけつりて、御守を上て書てかけさせまいらする、御即位過て彼御守を種との御たからにそへて、帝の生氣の方のちにうつむ也、此木を御賀の玉の木と云、当家にハ然す、をか玉の木と申ハ、片野のみかりに鳥を付てたてまつるしハと云木なり、是口伝也、更記事をゆるすへからすと云

めとにけつり花の事 ウハカキ 同

めとハ妻戸の事也、種との花をけつりて妻戸に」かさしさす也、口伝なり、又云箸と○草也、又曰右近馬場のひをりの日、まゆみの手継のかさしにさせさす花ともいへり

三河な草の事 ウハカキ 同

是にあまたの説あり、或ハひしと云草、或ハ河みとり、或ハ河たて、或ハをもたかと云、河骨と申草也、口伝也、記ことを免へからす

四重大事 ウハカキモモ大事

御賀玉木

内侍所

賀和嫁

宝剣」

妻戸けつり花

神璽

五三鳥之大事

一よふこ鳥の事 一説さる、一説ハことり、この鳥ハはやこくと云やうになくゆへに云といへり、又人をも云といへり、春の山野に出て、わかな・わらひ風情とりあつめて、かへるさに友をよふゆへに、かく云といへり、又つゝ鳥といふあり、是を家の口伝とす

一いなおほせ鳥の事 家とに種との説あれとも、口伝庭たゝきを云也 一百千とりの事 鶯と云は家の口伝、鶯一にかきらす、」種々の鳥、春ハおなし心にさへつるを百千とりといふ也

吉野の山の桜の事 ウハカキ 又口伝

此集にさる哥みえず、撰者をして云へからす、其上対して書、立田河の哥ハあり、旁以不審あるへき事也、当家口伝 文武天皇芳野山に御遊覧の時、御ともにありて人丸、白雲に色の千くさにみえつるハこのもかもの桜なりけりと云、又説ちるは雪ちらぬハ雲とみゆる哉吉野の山の花のよそめはと云、相構」可秘蔵也

七 風躰口伝哥 ウハカキ 風躰之事

八 久毛立 伊左爰尔 寿明名残 梅能波奈^{22ウ} 左越鹿乃妻間 夕去者

野边能秋風

来ぬ人をまつほの永日のもりのしめなほ

みすとやいはん玉津嶋 此外三代宗匠撰集之自哥又入撰集、仏神御

哥等也

八 天地人之哥之事 ウハカキ 三才の大事

久かたのあめにしてハとハ、天上の事也、下照姫ハ天稚彦^{マヤ}の妻也、あめわかひこ崩御の時、喪屋を天につくりてもかりす、したてるひめのせうと味耜推彦根の神とふらはんとて、天にのほりてありけるに、その形うるハしくして、二の岳と二の谷との間に照かゝやくをみて、下照姫此事を人にしらしめんとて、哥よみして云、阿妹^{23オ}奈屢夜をとたなハたのうなかせるたまのみすまるのあなたまハやみたにふたわたらすあちすきたかひこね返哥^{返哥にあ字、文字亦し、是ハ舅姑ニ始テ対シテ、扱無シタル哥也}云あまさかるひるりつめのいわたらすましといしかハかたふきかたうけにあまはりわたしまろよしくこわいしかハふたりち此

哥の事也

一地にしての哥の事 出雲国に宮作して説給ふ、素戔嗚尊八雲^{マヤ}云一の

哥也

一人の世となりて素戔嗚尊の卅一字の哥を用よむと也、かな序にてハ

ことほりみにくし、家の口伝天地人の哥此分なり

九 ほのくの哥の事 ウハカキ 秘^{23ウ}

此哥にさまくの義家くに口伝する所也、然共貫之旅の部に入たり、

更此外ハ不及沙汰事なり、しめて今議をたつ 天武天皇 第一の皇

子草壁の太子、十九歳にして世を早し給ふをよめる哥となん、ほの

くくと云に四の義あり、明若寿風也、万葉につかふ所也、明と云ハ

夜などの明ぬるを云、左伝に明旦とかきて、ほのくくとよめり、若

をほのくくと云、春の草木のもえ出る躰なり、典義抄云、深草未出

春色若^{ホク}たりといへり、寿風は常に文道につかふ字也、文選云、

寿^{ホノカニツタウ} 伝之公政得之道といへり、文集云 風聞^{ホノカニキク} といへり、此四の

義の内にハ今の哥^{24オ}「寿の義なり、王子の崩にあつる也、浦とハ此世界

をへたて行によそへたり、霧又物をへたつるならひ也、一説霧を病

にあつるよし申、嶋かくれ行とハ去行なり、又生老病死の四魔にも

あつるよし申、此四にかくされ給、舟をしそ思ふとハ、舟を王にた

とへたり、王子ハ帝にたかふへからず、然者舟と云也、貞観政要云、

君如舟臣如水といへり、種との義共あれとも、不及筆論者也

十 古哥の事 ウハカキ口伝

伊津具志喜 御賀本尔而茂路と能人乎見給伝三多賀良都作古と路

作之波所^{24ウ} 義利在之

十一 重之重 ウハカキモ重之重

身仁邪奈久 他仁慈乎与

十二 奉授 ウハカキ 土台

今上皇帝 和哥

神南日能 依論言 上桜花哥

(一) 行分空白

延喜三年十一月二十二日 紀貫之上

(二) 行分空白

一古今伝受時守之事 私

伊勢両宮^{25オ}

住吉大明神

玉津嶋大明神

如此紙二枚に書て紙一枚に立につゝみて面に正^{アキマツ}一通此分つゝみる上に師の名を下にかく也

柿本朝臣

紀貫之

助内侍 此裏に代々の哥人を書也

如此、前のことく紙二枚に書、つゝみて面に直^{アキマツ}如此一通下に師の名書事如前、かやうに二通に可認を、故実^{コト}に今は二通を一通にかきてつゝみて、面裏に正直と書、下に師の名をかきて^{25ウ}「袖に付るを、
当時は講談の座の天井にうちつくる也と云

(一行分空白)

一切昏の事、一にかさねて上のはしを上にして、三におる、弟子を取時にひらけハ、上ハひろくれハやかて上をみる義也、袋ハ布を青く染て、あさのをにてつゝりくゝりをもする也 十一通伊勢之十二通書事

(一行分空白)

伝受の巻物四枚引き

(一行分空白)

切紙の上口伝

一をか玉の木の事 片野のみかりに、鳥をつけたて^{26オ}「まつるとしはと云木也、是口伝也、としはをか玉の木といふ事、鳥を付ると云故なり、鳥ハ玉しゐの方へ取也、其故は榊に天照大神の御魂の鏡を付たり、是を表義也と云、置玉といふ心もあり 畢竟重大事時、内侍所と

比する也、常光院ハと柴を用、当流神木を用也

二めとのけつれ花^{ツレハナ}の事 めとハ妻戸の事也 種々の花をけつり、妻戸にかさしさす也、是口伝也、如此妻戸にけつり花をしてかくる時節ある也、其故は二条后に比したてまつる、朝帝国母にまします、此大徳故也と云、畢竟重大事^{26ウ}の時、神璽に比する也

三河名草の事 河骨と申草也、是口伝なり、此草をは宝剣にさしたり、劍ハ水を躰とす、川水の清浄より、此草生出たるによせて、比したりと云、水にもおほれず花咲なり

四重の大事 此切昏ハ前の三ヶを神璽・宝剣・内侍に比する子細をあかしたる也、仮令前の切昏ハたとへなり、三種の神器をいはんため也、私惣而此三古今になき也、さるを物名の内の草木をもつてたとへ、かゝる部を御門に伝受申所也、此心ましますして、不可叶者也^{27オ}

内侍所鏡にてましますなり、真程^{マダマ}中の三をそなへたる也、鏡の本躰ハ空虚にして、而も能万象をそなへたり、此理をのつから正直なる物也、畢竟一切事正直による間、此事を一大事と云此故也

宝剣 宝剣惣して劍ハ本水躰也、自水起劍と云、陰の形也と云、以爰^{アヘ}征罰の根本と云

神璽 玉也 陰陽和合して、玉となる也、神代にも天照大神と素戔鳴尊と御中違の時、玉と劍とを取かへ給ひて、御中なをる事あり、陰陽表事也と云^{27ウ}

極たる口伝云、めとにけつり花ハ、めとハ妻戸、戸は門なれば、陰形に比す、一切只爰を根本とす、けつり花は男陽形に比すと云、されは陰陽を兼たり、畢竟して口伝云、この三の宝をもつて、御門

天下をたもち得也、此三一もかけてハなるヘからず、帝王としてハ此三を宝とし給ふゆヘ也、正直と征討と慈悲との三なりと云、重口伝云、前の三猶暫の事也、いかに三の宝ありとも、それはかりにてハ天下おさめかたし、此三の事を心にかけて、朝と暮と可思也と云、御門御心にかけて、天下を平安にたもち給なりつるヘきにて、さるヘき」斗にてはなし、箱におさめても、御心にかけてらるゝ時、天下をおさめ給ふ也、是ハあなち君一人にても不可限、人との心底にも、此三をそなヘヘきにこそ、帝と諸人不可替、共に天照大神一躰の故也

五三鳥の事 一喚子鳥、此哥ハ元初の一念を読む物也、其一念と云ハ忽然念起名為無明の義也、無明とハ煩惱の事なり、はからさるにおこる一念也、喚子鳥とハ此一念によひ出さるゝ所を云也、山中とハ深く高き義也、大空寂の所なり、爰ハ更に元来遠近高下の分別なくは、かゝれぬさかみを、たつきもしぬ山中」とハいへり、おほつかなくもとハ、はからさる一念のよひ出す所は、更に思慮せられぬさかひなり、是元初の一念の端的也

一姪名負鳥 喚子鳥ハ一念おこる初をいへり、その後姪をわたして、十月をへて生出る所を門といへり、人と開たる心也、陰陽和合して、五大をまろめたる所を、鳥とハなすらへたる也、書に鶏の子のことしといふ心なり、鳴くなへにとハ、ことわさのはしまる義なり、今朝ハ即時端的の義也、風と雁とハ世界の色声の目にみえ、耳に聞ゆる所をいへり、隠頭の百端に世の造作なる心なり」

一百千鳥 さへつるとハ万物の形色声の心なり、あらたまるとハ立帰りにてハ、本のやうになかゝする義也、是是法住法位世間相常住の

心也、我そふりぬるとハ、有待の身の義也、此身は二度立かへり、あらたまる事なく古ぬる物也、世界ハ我といふ物なき時は、常住なり、されハ我と云物に一切の喜妬愛染あるによつて、終に衰老のなけきある也、さて消てハいつち行そなれば、元初の自性にかへる心也、能可思悟之、禪の四了簡を可思也

六吉野山の桜の事 只対しての事、甚深面白事也と云、乍去為証勸之歟、此外別無義切帝の二首猶前を可用とぞ、如此そとしたるも切紙の一の口伝也

一風躰の事 風躰口伝哥

八雲立 是ハやすらかにかるきなり、誠に神代の大道也 ほの／＼と、これハ少重大方大道すたれてハ、物のことハリも深かんとし、ことのはをとゝのへなとする習也、されと此哥ハ、心さしの深き思ひより読る哥なれハ、大道くたりて、すたれたる世の義にハあらず、是尤秘藏の義とぞ

梅花 これハほの／＼よりハ軽く、八重かきよりハ少重し、さをしかの妻問、梅花同躰の軽さ也、何^{30オ}も景氣に感したる哥也、惣而景氣の哥は、かるかるへし、待花・見花やうの題は軽く、落花面白さまを思ひ入へしとぞ、問恋・逢恋ハかるく、別恋は重かるへし、四時も又如此、三躰のさまにて心得へし、但其題によりてその心あるへし夕去ハ、此哥ハ俊成自讚の哥なりとぞ、風躰にも心詞にもかなへり、此哥を三品期に、こしへの禅尼して定家卿にの給ひける義有之とぞ、此道に伝受の哥といふ事あり、其儀なり

来ぬ人を これハ古風の姿也、しかも詞なとゝのほりぬる哥也、定家卿又是を子孫のためにのせ侍る、一^{30ウ}なかき日の 是ハ夕去ハ・

こぬ人を、などよりは軽し、夏の哥なれば也、此五字五句にわたる也

人とハ、是をみつとやとなをされけるよし侍り、風躰のかたへ入時ハ、みすとや也、心ハ同かるへし、風流の方ハ猶、みすとやまさるなり、四首の内にハ殊に軽し

八三才の事、これ又切昏の上の外無別義、猶と人の世と成てと并素戔嗚の所をあげたれハ、能心得させんため也、三才の起をいへり、面に書云へき義にあらされは、切昏にすと云

九ほの／＼の哥の事、生老病死の四魔と云事にて用之、嶋かくれば八嶋の外へこきはなる／＼と心得³¹へし、則此家をさるの心也、此哥ほの／＼とあかしとつゝけて、明闇をいへり而已、又明行方へいへり、旅の部に入たる事、甚深の妙也、浮世の旅終に、誰も本覚の古郷に可帰よしにこそ

十古哥の事、いつくしき御かほにして、諸の人を見給ふとハ、いかにもけうわにして、人に向給うへき也、三宝をなしとハ、無事にして諸人を見給ふ君の御心を云也、有為宝ハ暫の物也、無事にして万民を見給時、天下治め此見給御志かきりあらしと云、心に志ハかきりあらしと云心也、又万民も上をありかたく思ひたてまつる事、限あらしと云也、是ハ古哥の躰にて、文字³¹の沙汰に不及、此心肝心の故に口伝す、秘之

十一重之重、此事還て無曲様に人可思歟、真実学ても不可及、習てもたもたぬ所也、習ひ／＼て我心腑に染へき事ハ、此一事にこそ、此外に身を立、国をおさめ、家をおさめん事あらんや、自然ハ天性無欲なるものハ世にあれとも、他をめぐみあはれむ心はなき也、それ

は不可有曲とそ、此心上一人より下万人におよほす也

十一土台、此集の土台也、是より哥を授る事はしまるなり、人丸文武に道を授奉りて、此哥を申也、是を知て貫之、延喜へ神南日の哥を³²奉授也、就論言上梅花哥とハ、さらハ汝も以自哥可申由の論言によりて、梅花の哥を授奉ると也、此後万葉ハありながら、大様の物なれハ、自撰哥の御沙汰をと思召立所、自是起なり、一部の土台と習之也、以上十二通

常光院二条家切昏畢
○当家自為家直に相伝の分^{常録}之分八通

一号題之口伝、ウハカキ、題の事
古 ^{文武天皇} ^{人丸} 今 ^{醍醐天皇} 今

古 ^{自宇多天皇} 今 ^{自宇多天皇} 今 ^{自宇多天皇} 今
古 ^{天地未分} 今 ^{自開立} 今 ³² ^ウ

以上
二御賀玉木、ウハカキ三ノ口伝の内
柴の事当時さる木ありとも不聞、狭衣と云物語に文字一を残していへる哥のあるにや、若此類歟、又神社等にて用木の事歟、猶可聞口伝也、莫題筆論云々

三妻戸猝花、ウハカキ同
当時此名更不聞、若易二用めと、云草はいひつたへたり、妻戸の事也、けつり花とハ此戸に種々の花を結びつりてさし、又かくる也、如此する時節あるにや、此説輕二似たり、殊以不可解説而已³³

以上
四加和名種、ウハカキ同

此草家と説不同、をもたかを云也、加和骨花圃葉はせをに似てちいさし、此事不得記事

以上

五 ウハカキ 重之重

玉 ナヒシ所 天

戸 シルシノハコ 法度

和 ホウケン 治天下

六 ウハカキ 鳥尺

姪名負鳥 庭タ、キ

此鳥の風情を見て、神代にみとのまきはひあり、是33ウによりて此名を得たり

今上

喚子鳥 ツ、トリ

つゝと鳴て人をよふに似たり、依之有此名

関白

百千鳥 ヨロツノヨリ

春ハよろつの鳥のさへつれハ、此名あり

臣

已上

此切紙の奥の裏に如此書也

いなおほせ鳥ハ万物の根源たるにより、帝にたとへ34オ「たてまつる、秋の部にある事、猶口伝あり

よふこ鳥春来て当気を人々にしらしむるによりて、関白にたとふ也 百千とり春来てさへつる気色、群臣の王命にしたかふさま、関白の

殿に応躰しめしなから、よろつの鳥の得レ春ヲあつまりさへつるに似たり、よりて臣にたとふ也

七 賀茂祭哥の事 ウハカキ祭の事

此集肝心只此一事也、猶可聞口伝者也

已上

八 名題の事 ウハカキ玄々の旨34ウ

真躰 此うらに鏡と書也

已上

一 高伝書

授阿古子和哥

桜花開サキ尔気良之毛

延長元年四月八日 貫之

私書加 此書一通又書一通号高記 又書一通号末記 内傳作也

多いほう三年正月廿九日藤原基俊にしろところならひに文ともさ

つけ畢

前の切帋三内宗祇ハ三鳥を二通にして相伝也

姪名負鳥 口伝所庭タ、キ奥之旨猶口伝にあり35オ

呼子鳥 口伝つゝ鳥、鳴声人をよふに似たりと云と

百千鳥 口伝万の鳥と云也、春になれハ、さへつるによりて、もと

ちの鳥と云也、鶯をはしめて、いつれの鳥なりとも、もれ侍るへ

からすと云と

以上

三 鳥重の口伝

姪名負鳥

帝王

喚子鳥

関白

百千鳥^{35ウ}

群臣

以上

(二行分空白)

古今伝受次第

清濁 談義 伝受 口伝

切紙 奥書 但依人依時儀之由可心得也

(二行分空白)

一番文人 二番自延上古 三番土台

四番<sup>自神代以前
古人に今</sup> 五番天地 六番真^{36オ}

古今集之事 初度

文明三年八月十五日以相伝説と伝受僧宗祇畢

従五位下平常縁判

文明五年四月十八日 古今集之説悉以僧宗祇仁授申畢、心於堅横

仁懸天此文於可守番也

八代末葉下野守平常縁判

置乎の早案^{37イ}

古今伝受之事 不可有子細之由承候、自今已後不可疎儀候、并伝受

之説之不可有聊尔候、^{36ウ}

此旨私曲候者誓文アリ 年号日付 名判

(二行分空白)

伊勢物語の伝受の事

非其器者不可漏脱事右若有違背事候者誓文有之

(二行分空白)

自素伝宗祇一の免許の哥短冊也

(二行分空白)

身^{宗祇庵主へ}をあはせともなふ人の世にもあらはいにしへ今をかたりてよ君^{常縁}

紅葉はのみたる、立田白雲の花のみ吉野おもひわするな^同

をろかなる事をハ置て伝くる跡久かたの月を見よ君^{同37オ}

伊勢物語の事

以当流之説授僧宗祇申畢

文明四年^{壬午}六月廿九日 平常縁判

当家三鳥口伝

一姪名負鳥 和合の物なれば、帝にたとふ、王ハ万民のいたゞく所な

れは也、秋は年中のおとろへ行きかひ也、王又零落の道をおこす所、

これ帝心なり、よりに秋の部にいるゝ也

一喚子鳥 時節を得て、人に告教る心を関白といへり、帝心を性とし

て、時節に応する下知の心也、當時も彼所の会などに、武家等の懐

帯には、^{37ウ}詠応教とかけり

一百千鳥 関白の教を聞て、各々事をなすることく、春来れば数と鳥

さへつると云心也

一花つみと云事ハ、昔は花つみ石塔と云て、春の野に出て子日などの

やうにあそひて、石をひろひて塔を立て、供養しける也、此事今ハ

あれとも、只可然寺にて行なり、一の所蔵人所にハ今もし侍る也、

其日導師教化にハ、行基菩薩哥云、もゝしとやくに八十しやくそへ

て給ひてしちふさのむくひ今そ我する、又今日せすはいつかハすへ

き夜も更ぬ我世もふけぬいつか又せん、誦之云38オ

一廿卷 神遊神楽之事 神通自在口伝在之神通自在ハ性也、故ハ真実

の神通、自在ハ例式の奇異不思議にあらず、青黄赤白黒の色もなく、
長短万円の形もなく、性常住不滅の理也

一取物と云ハ、皆此上の表事也、袖ハ不変にして以前の性常住の表事
なり、かくらハ詫物ニ、是ハ意識の色とに、物とにふれて、それに
成行表事也、弓ハ随意取なすそれ／＼に随心也、世上の上に不随者
不可有表示也、杓ハ億持物を億持すると云ハ、心に物をひつそくし
て、無余事心なり、杓に水を汲てたとへたるかこときの表示也、惣
而取物と云ハ38ウ十種の取物などゝてあれと、四種此集にハ挙たり
一序の大事 唯受一人

奈良の御門の事 貫之ハ平城のみに書也、是を定家観見せらるゝに
たかふ事あり、故如何なれば平城の御宇にハ人丸みえず、人丸出現
ハ文武の比なれば、文武と付らる其時は、初の文武と付たる所ハ真
実、文武中の万葉撰すと云所を、聖武に心得、又年ハ百とせあまり、
世ハ十継を文武に心得なり、これ唯受一人の大事也、故ハ文武の比
人丸出生万葉撰のよしたしかに貫之不知、いかて古今の撰者棟梁た
る貫之を、是分の事不知とあやまりにハなす39オへきなれば、上の義を
ハなにとなくいひなして、口伝如此用、是当流の義也、尤面白、未
の百年あまりの所を、平城に口伝して可然歟、猶彼御時、文武是よ
りさき聖武、年ハ百年のあまりを、平城と心得る可然歟、貫之は平
城と斗心得てかける也、定家文武・聖武是よりさきの口伝、此集より
さきなり

一杉たてる門、口伝直道の心、杉の直なるをもつて示す理也、哥ハ明
神の御哥也

一伊佐爰尔の哥ハ、日神の御哥となん

一大和舞の事此国ふり也、此国ふりと云事肝心なり、此国諸事の風な
り39ウ

一卷頭の哥有両儀 一にハ古今の義一にハ物との上をもつて知事也、
是も古今のことハリなるへし、家の説に又一の心あり、道といふは
先王の道・当帝の道二也、何も同義也、然共以当今之義用之、又云
神武天皇の至国の常立まてを、当帝の内にこめて取之也、此哥ハ心
に発する所を正に取なり、されハ、人の心を種としてと云も、其心
あるへし、此下に種との義あるへし、只人の心と云二字にきはまる
へし、尤以所仰也

一落ても水の哥にて、四時を思ふ心あり、然者哥人の所楽在之、筆の
所及にあらず、此二首は内外40オを平にする哥也、おちても水のハ陽
の哥也、よしや世中ハ陰の哥なり、此二首を内外にあつる事、故実
と云物なり、此上に道といふ事あり、此二に心住したる時、道に邪
ハなき也、猶藻に住虫を可思にや

稽古方の事

稽 ウハカキ此分

稽古方

情新 詞古

心直 詞艶

弘長元年二月九日授素暹畢

三代撰者融覚 御判40ウ

再稽

ウラニオクヨリハシヘ代ノ作者今の

相伝ノ作者マテカキツラヌ

情新きハ風情の様によりて、心の新（つと）あたらしくなる也、水の器物に
したかひて、さまを得ることし

天の原おもへハかはる色もなし

天の河とをきわたりに成にけり

此類なるへし、たゞ切に心を付て思ふへき也、題を数遍吟味せよ、

題に能と心しみぬれば、哥に余情もあり、又見さめせぬ也、たゞ心

をこしらへぬれハ、哥たけもたかくきよけなる也、心をこしらへぬ

るとハ、題を心によくそめて、他事なきをいふなり（41オ）

以上

三作伝 ウハカキ此分

心を染古風 詞を先達にならふへし

心をたゞしく 詞をすなほに可詠

心を物にまかせて 和を基とせよ

惣にハ物に対して事なかるへし、是を正といふ也

（二行分空白）

古今序に、そのはしめを思へハ、かゝるへくなんあらぬ代との御門

といへり

上古の躰へたゞり行ゆへに、臣の賢愚をしらしめす、然に詠和哥是

すてす、道の零落と謂へしと（41ウ）云と、猶有口伝

以上

四道 ウハカキ此分

百人一首（正直）始終古今のさまハあれとも、玄之玄は同之也、但其実落て

花や多分に侍らん有口伝

二神（正）の御哥と百人一首の始（直）同前有口伝

天地未分と二神御哥同前 有口伝

代と勅撰之内、題不知とあるハ、物によらず縁にひかれずして、正

直の哥なり、又題不知の外の哥を、そのまゝ心得させんためなり、

又題しらすの（42コ）の哥は多議有歟、又憚の事ある歟（42オ）

以上

私に書加

（行頭ニ「切紙ノオクノウラニ是ヲカク也」トアリ）

池塘（タウ）生春草 万葉古今之躰

露ハ白シ寒塘（タウ）草 古今より建仁・建保の上是之躰也

五和 ウハカキ此事

序云人世にありて無為なる事あたハす、其心あらは也、為休俗心詠

和哥その哥不作曲節、眼前を不失可詠也

万物心に起ハ即詠哥、又時と万物をとゞめされ、時々に又心万物に

さかはされ、さるはされハ無為なる事あり、是を和と云也、此心よ

り詠出哥に、鬼神感動す、常におもふへし（42ウ）

以上

六中 ウハカキ此分 是一句ノ文ノ事也

一句の文の事、清の一句より六の義を立るによりて、一句の文と云

あきらけき神達をのゝおもひたまへ告

このときにきよくいさきよき事あり教

もろゝの法は影と形のことし持

清くいさ清きものは、かりそめにもけかるゝ事なし直

心をとらへうへからす正 深空と云、深空ハ不居の心也

みな花よりなれる、このみはとハのたまはさる也合

花のさきては必実のなる様の事にハあらず、自然と具したる心とい

ふ心也、猶別昏にあり

此六通の外ハ加追之と云、前も初六通と云

文明十年六月五日 杣午剋

一和哥無師匠、心を種とする間いへり、又心より出て自覚る物也、此文に合なり、是口伝也、秘と審之、只以旧哥為師、詞を見ならはんかためなり、口伝也、秘と審之

一未来記関書といへり、哥を詠する時ハ、心色と様とにわたり、山河

草木にゆけとも、心其詞も風情も風躰も、此書の外なるへし、努と

此書を不可学此書を心の関として、こゝへ心のゆかんをはをし

とむへし、是により関書と也、秘密・奥義・口伝なり

一同未来記に和哥得業生柿本貫躬素伝得業生 公家方とくこうしやう、

得業生ハ、何にても一道きはめたる時、ゆるさるゝ名也、柿本貫躬

ハ人丸・貫之・躬恒三人の名也、此書の哥、只この三人の名を、柿本

貫躬といひつゝけたるやうの心也、岩本菅の哥などにて、心得へし、

これ深秘なり

一猶案之とハ本哥にも、地文の二を見分て、可取也

一伊勢・小町の類、此位なる哥人を口伝する也

一一人一首号ス清角抄ト、何にも角ハ二あるなり、道諸方面様同ク習抄

なるによりかく云也、口伝也

一百人一首に随分上手のいらぬは、数きたまりてつまれハ也、又それ

のゆかりに作者を比する也

一同抄に人丸ほのゝなどのいらぬ事、衆鳥遊道同材義也、さまかは

れとも、同秀哥と云

一伝授哥之次第 皆以口授追書付内後日

授俊成和哥

立田河紅葉乱而流女里

多津田河紅葉と流神南比の

保延四年八月十五日 基俊

授定家和哥

結手の志津久尔と古留山の井の

治承三年二月九日 积阿

授為家和哥

佐保鹿の妻問山の岡辺那留追加松帆の哥

貞応元年七月六日 定家

授為氏和哥

松帆の浦の追加永秘の松の志女繩久利返々哥

建長三年十二月十三日 為家

授為世和哥

永日の森のしめ繩

弘安元年十二月廿八日 為氏

授頓阿和哥

前哥 元応二年七月廿六日 為世

授経賢和哥

春立と云斗尔や三吉野の

貞治三年四月廿一日 頼阿

授堯尋和哥

霧たちて鶉なく也山科の岩田の小野の秋のゆふ暮⁴⁵」

応安五年六月一日 経賢

授堯孝和哥

前哥

応永十年正月十日 堯尋

百舌鳥乃鳴波志の立枝能薄紅葉哀波深秋乃色賀那

享徳三年十二月廿七日 堯孝

授頼常和哥

極楽ハ伊賀斗那留光尔天今夜乃月之空尔澄覧

文明十年八月廿一日 常縁

授素純和哥⁴⁶」

天能原思遍波賀留色毛那志

文明十四年正月十日 頼常

(一行分空白)

伝受次第第二条家

紀氏女説在口伝了見在之

○左金吾—五条三品—京極黄門

中院亜相—冷泉黄門—御子左^{同了見説}

二条

頼阿—経賢—堯尋—堯孝

常縁—宗祇—素純

素純⁴⁶」

伝受次第 当家

○左金吾—五条三品—京極黄門

中院亜相—素暹—行氏—時常

氏村—常顕—師氏—素明—氏教

常縁—頼常—素純

素純⁴⁷」

一題之事

山家秋月 惣して三首の題は、天地人の三才にあてゝ出す間、こ

れハ天地をかゝへたり

月照草花 此題ハ前の天地とあるを、山家といふに對して、草の

露を照すとあれは、野と心得たるにや、にほひと云物題の心得に
あり、返とも中の題はにほひなり

月前遠情 是ハ又古実といふ物也、草の露を照すといふる近ければ、

遠にとりてはるくと思やれる心あるにや、たゝ哥よむにたかふ

へからず、可案にや侍らん、十首・二十首にはかやうの事あるへ

からす、返と出題大事也

(一) 一行空白^{48オ}

(二) 丁分空白^{49オ}

僻案重口決見聞

一古今兩字之事

種と儀理等題号の所に書之、只今口決と云ハ、此兩字につきて黒色白色の義あり、黒色は古の字・心、白色ハ今の字の心也、これ大かたの色の黒白にあらず、今云所の黒ハ一切無分別之境、遍一色の上に無念無相なるかことし、白は万物明白にして、見聞覚知のことほり也、又黒色をたて、黒を古色を今にあつる説もあり、猶古の字の心ハ只無事所也、此無事又今日の色相の和にしたかふへきにや、今日といふは今の「字」の心也

一此抄を僻案といへる心は、先卑下の義也、又上に大方の義をあかして、下に甚深の義をこめたれハ、真実の理をしらぬ所を僻案と云也、又哥の風景の義理にあらされハ、下のことほりをさして此名あり、尤の秘藏也

一此朱点の哥の下心如此、貫之思けるか此義未決、いかてか貫之所より不伝の此義を可立哉、可尋之我朝の道日と夜とおとろへ侍る上に、此工夫を先賢なすといへり

袖ひちてむすひし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん

三時うつりかはりて、氷をさへ吹とく風の端的に古を^{50オ}しるの心也、いつれも物にとまらぬ所也、とまらぬ心あれハ、むつまじき時をも着せず、すさまじき折をもなけかず、しかれハ心中にむすほるゝ所もなく、心を案するの理也、是尤哥人の思ふへき所

也、いかにも此ことほりを工夫して、身心をまかすへき事とぞ春きてハ花とやみえん白雪のかゝれる枝にうくひすのなく

無心なる者に心を付て云かことく、人の心をはかり推する事を、いましむるをしへなり

心さしふかくそさめてしおりけれハきえあへぬ雪の花トみゆらん
信の一字也、一切に渡る也、扁と見ている天の石に立も此心歟、

善悪共に此心かなす也、よく可思量をし^{50ウ}

春日野のとふひの野守出てみよ今いくかありて若なつみてん

知てとふハ札也といふやうの心あるへし、哥よむ時此心大切也
もゝ千鳥さへつる春ハ物ことにあらたまれとも我そふりゆく

もゝ千鳥とハ百鳥の事のたとへ也、さまゝの事をとしたつさはりても、我身の老となる事はのかれぬ道なり、是を思ふへきのい

さめ也、道ある者ハ物ゝに心を付て身上をしるか同出^{51ウ}なり

春くれは雁かへる也白雲の道ゆきふりにことやつてまし

みちをもたゝぬをしへなり、哥人ことに思へくや

春の夜のやみハあやなし梅の花色こそ見えねかやハかくるゝ^{51オ}

心といふ物はかくされぬ物也、内に心をかくす物のいましめなり

誰しかもとめて折つる春霞たてちかくすらん山のさくらを

これハ事をその物ゝにまかせぬを嫌也、かくれハそのまゝなかもあらはれハ、そのまゝみるへきよし也、善悪みなその時ゝにま

かせすしてもとむるをいましむ、まかれる木をもきらふへからず、なをき木をももとむへからずとそ是天真也

桜花春くはゝれる年たにも人の心にあかれやハせぬ

足とする心のなきをいましむる也

までといふにちらせしとまる物ならハ何を桜に思ひたままし」^{51ウ}と
ちらしてしまるとハ、散乱の心のなからましかは、世界の風俗に愁
あらんやと云事を思義也

いさ桜われもちりなん一さかりありなハ人にうきめみえ南
このまゝ心うる也

ことならハきかずやハあらぬ桜花みる我さへにしつ心なし

同前

春風ハ花のあたりをよきて吹心つからやうつろふとみん

あしきを友とせされのをしへなり

みわ山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花や咲らむ

是ハ世上にいかなる人かありてみるらん聞らんと可恥よしのをし

へなり、又賢聖の身をかくす事あるを^{53オ}したふへきの心也

いさけふハ春の山辺にましりなん暮なハなけのはなのかけかハ

所をさためすして道をあひすへきの心也、花を道にとる也、くれ

なはとハ人はてたれはとて、世になかゝるへきならねはといふ心

也、又たゝ心たに心として侍らハ、ちりにまははり世間の色にそ

みてもといふの心也

春ことに花の盛はありなめとあひみん事ハ命なりけり

是ハ無事の心也、無事ハ命の媒也、身を全して道をあふくへきの

心也、又云命とハ道を相継事を云、道ハ常住にして主なき物なり、

然るを人として相続するを道とハいふ也^{52ツ}

花のこと世のつねならハすくして昔ハ又もかへりきなまし

是も花をハ道に取なり、世のつねならんとハ、我心常住ならぬを

云也、道を取ても、我心物に動せず、定心あらは、道ハ昔にかは

らてあるへきの心なり、道をえても其道をまもらずしてハ、かい
なるへきのをしへなり、道にハ古今なし、たゝ心のいたすによ
り昔今のへたてある也

駒なめていさみにゆかむ古郷ハ雪とのみこそはなハちるらめ

古郷を道の零落の所にとる、雪とちるハ、実所を失にたとふ、惣

の心ハ、猶たえぬる道をも、心ある人とともなひて、たつねみる

へきの教なり^{53オ}

思ふとち春の山辺に打まれてそこともいはぬ旅ねしてしか

朋友の心を無二にして、さたむる所もなく、ゆうなる道をねかふへ

きの心なり、又云思ふとちとハいつくにても、道ある人あらはとも

なひて、世をすくしたきの心なり、春の山辺とハ諸道の根源也

郭公ななく里のあまたあれハ猶うとまれぬおもふ物から

朋友などの音信をよるこはずして、なをよそにもかくやなといふ

を嫌なり、我すむ里に声し絶すはの心を、思ふへきをしへ也

やよやまで只郭公ことつてんわれ世中にすみわひぬとよ

是ハいく世しもあらしと、たゝ無常のことをはりを思ふ^{53ツ}へき心なり、

住わふる所をなけくをいさむる教也

五月雨の空もとゝろに時雨なにをうしとかよたゝなくらん

五月雨の空をは物を分別せぬ心にとる也、その事にあたりても、

ことゝしきはあしきなり

むかしへや今も恋しき時鳥古郷にしもなきてきつらん

我むかしを思ふとて、無心の物に心をつけていふ義なり、わか愁

あるとき他人のよるこひをしらす、我喜ある時他の愁をわするゝ

の教也

木の間よりもりくる月の影みれハ心つくしの秋ハきにけり

木をハ世界の悪にたとふ、月をハ善にとる、心ハかく悪趣増長の
中にも、道のある事ハほのかに有物也⁵⁴その善なる道も悪にうはハ
れて、つゝに失する心なり、中／＼一へんに迷はかりならハ、さ
てもあるへきを、少善のあるか世の心つくしとも愁ともなるたと
へ也、一人のうへにもある事也、こゝを思ふへきのをしへ也、又
云木の間の月のはれくもるをもつて、世界の理を思ぬ義なり
いつはとハ時ハわかねと秋の夜そ物思ふ事の限也ける

秋の夜とハ人の我行すをなくおもふのとへなり、心ハ世はい
つともなくうき物なれと、猶人の朝の露をもまたぬ身にて、ゆく末
をなくおもひて、造作をしたくハへを思ふを歎観する義也、思ふ
事の万端⁵⁴なるうちに、有世を遙^{つや}／＼と思なす事、殊はかなき也
白雲にはね打かはしとふ雁の数さへみゆる秋のよの月

これハ物のまきれぬ事にたとふ、雁をハ悪人に取、月をハ聖人に
とる、聖人の前にてハ心たかく、身をもち思ひあかる物ハ、まき
れぬよし也、数さへみゆるとハ、行跡のさま／＼みせるに取、只
心をきよくたしなむへきの教也、又云我道明白なれば、一切の人
の道もまよはぬ心也

吾門にいなおほせ鳥の鳴なへに今朝吹風に雁ハきにけり

我苦をもつてハ、他のくるしみをはかり、我愁をもつて、他の愁
をはかる心也⁵⁵

秋萩にうらひれをれハ足引の山したとよみ鹿の鳴らん

物／＼に心のまよはざるを、いましむるの教なり

折てみはおちそしぬへき秋萩の枝もたは^{とそ}にをける白露

愛する物に猶着する心をいましむる也、かならず着ふかけれハ、
みたるゝ事あり

雪ふれば冬こもりせる草も木も春にしられぬ花そ咲ける

冬こもりとハ閑居の心、まことにさしこもりて、世にたつさハラ
は心の花也、それを春にしられぬと云、ひつきやう閑居にて心を
定る所ハ、人のしらぬ花也、又春もしらしと也

雪ふれハ木ことに花そ咲にけるいつれを梅とわきておらまし⁵⁵

時節のかんするたとへ也、只心法よハくて、和と道との二不立と
いふ心なり

すかる鳴秋の萩原朝立て旅行人をいつとかまたむ

是ハ世のうつろひ行せまる心也、秋をハ愁の方へ取也、旅行人と
ハ生死のさかひにまよふ人の事也、かくせまりうつろひ行世の
かきを、いつとかまたんとあはれむ心なり

朝なけにみへき君としたのまねは思い立ぬる草枕也

君とハ忍をうくる程の人の事也、それも又いく世しもあらしと、
万事を放下して、思すつるよしなり、忍の厚きを思ひすつる所誠
の出離也、また并忍⁵⁶人無為真実報忍者心にや

人やりの道ならなくに大方ハいき、しといひていさかへりなん
一切の道もたゞ我身のためにこそあれ、かくくるしけれハ、よし
何かハせんと思ひかへす心也、道をつとむる人ハ、かう人の心ハ
ある物そとよく守て、猶くるしめても尊を心さすへきよしの教な
り

いさゝめに時まつまにそ日ハへぬる心はせをハ人に見えつゝ

是ハ人のかきりわつかに六十年也、むそちの月日をふるハ、たゝ

夢のうちの夢なり、かくかりそのあひた、心のつたなきを見えぬる事、恥思ふへきをしへなり

春霞なしかよひちなかりせハ秋くる雁ハかへらさらまし」⁵⁶

是ハ霞をは迷の方へ取縁にひかれて、心をまたあらぬかたへ引かへしはて、多年の用心いたつらになる事有、其教なり、雁の古郷を縁にひかるゝにたとへいふなり

郭公鳴や五月のあやめ草あやめもしらぬ恋もする哉

これハ哥人の四時の風景にふけりて、かへりて造作待るにや、然して正道を失事あり、只一心のまことを思ふへきの教なり、又云善悪ともに道のことはりたゝさる所に、いにしへの賢聖をこふる心なり、只道ハしる人のほしき也

立かへり哀とそ思ふよそにても人に心をおきつしらなみ」⁵⁷

よそにてもとハ、よそにさしもはなさす人に准したかりて、いやと思ふ事をも又うらむへき事をも心にかくして、人にしたかふ心也、かくして道はたゆる物也、こゝを立かへり哀とそおもふと観すへきの義也、又云縁にしたかひしかとあひぬれハ、思心難叶、賢愚共にかくのことし、こゝを観するを立かへり哀とそおもふと云にこそ

夕暮ハ雲のはたてに物そ思ふ天つ空なる人をこふとて

是ハ空を仰て詮なき事をおもふを、かへりみすへきの教なり

我そのゝ梅のほつえに鶯のねに鳴ぬへき恋もする哉」⁵⁷

落着悪かるへき事をおもひ、はからすするわさをいましむるなり

いて我を人なとかめそおほ舟のゆたのたゆたにもの思ふ比そ

思の切なる時、正理を忘れて、我ことハりをいふの心なり

あは雪のたまれハかてにくたけつゝ我物思ひのしけき比かな

あは雪をハかるき事のたとへなり、はかなういたつらなる事に、心をつくすのいましめ也

よるへなみ身をこそ遠くへたてつれ心ハ君か影と成にき

よるへなみとハ世にたつきなき心也、さしはなたれたる君か影をへつらふ心を、いさむるの教也、只自然の道を観すへきの教なり」⁵⁸

大かたハ我名もみなときき出南よをうみへたにみるめすくなし

みるめをハよき道に取なり、世を海へたにみるめすくなきとハ、あるへき其家などにたに道のすくなきをたとへいふ也、心ハたゝ其人をしりて、其名にめつましき義なり、されハかゝる所をハこきいて遠さからんと云也、大方はとハ思とるやうの心也、又云船といふ物ハ奥にて徳ある物也、是ハ学者に取我と出身せんとおもふは、不可

然のたとへ也、世にひきいたされんは、勿論のことハり也

あつさ弓ひきのゝつゝら末つゝみに我思ふ人にことのしけゝむ

我おもふ人とハ何にても、我が心に着する物をさす也、よろしか

らぬ事ハ、かくてハ末いかならんと、身のためあしからんと思へ

と、今はかりにてハさのみやハあしからんと思ふ心にひかれて、毎度になのり行て、つゝらに身をいたつらになす事をいさむる教也、

二たひあやまちせずといふ事を能守へき事とそ

暁の鳴のはねかきもゝはかき君もこぬ夜ハ我ぞ数かく

暁ハ明闇のさかひなり、鳴のはねかきは我心の迷に身をくるしむるのたとへ也、君とハ君子也、道也、此君といふもよそになき物なり、心道なき時ハ君子きたらす、されハかきみたる世のくるし

みハ、たゝ我くるしむる也と云事を教る義也、尤可仰云」⁵⁹

今しはとわひにし物をさゝかにの衣にかゝり我をたのむる

うたかひなき吉凶をしりながら、蜘蛛をたのむ心をいふなり
哀ともうしとも物を思ふ時などか涙のいとなかるらん

是ハ善悪哀楽にハ主なきを、如何としてか涙のひまなくおつるそ
と、根源にもとつきて、只今の我心をせむる理也

水の面にしつく花の色さやかに君かみかけのおもほゆる哉

これハ心の一へんになきたとへ也、人として執をとめすといはん、
尤あるへからず、たゞ物くまかせて、心地を觀すへきとぞ」⁵⁹
色も香も昔のこさににほへともうえけむ人のかけそ恋しき

過たる事の詮なきに、心をついやさされの心なり

玉たれのかめやいつこよろきの磯の波にそおきに出にけり

いやしきむかしをとりいて、道ある人の出身するをおとすまし
きのいさめ也

さゝのはにふりつむ雪のうれをゝもみ本たちゆく我さかりはも

是ハしかるへき人の心ハさもなくて、はかなき情欲をかさねて年
月をゝくり、無道にして位をもちうしなひくたるよしを、たとへ
なけく也、雪をハ星霜の方へ取也

老ぬれハさらぬ別もありといへはいよくみまくほしき君哉」⁶⁰

是をハ老学の方へとる、君と云をハ仁にかたとるなり、とかくし
て人ハ老ぬれハ、かならず死するなり、そのまに学をこのみて仁
の道をねかひ、いたつらになさしと思ふへきの心也、みまくほし
きは仁の道をねかふ心なり

老ぬとてなどか我身をせめきけむ老すハけふにあはましものか

そのまゝこゝろうる也

しりにけむきゝてもいとへ世中ハ波のさハきに風そしくめる

当意也

世中のうきくにあきぬおく山の木のはにふれる雪やけなまし

世のうき事ハ、我といふ物のあるによれり、我をそた」⁶⁰てゝ、しか
もうき事をはらんすれは、いやましのうき事あり、しかし我
身をなき物にせんと、覚悟するの心なり

木にもあらす草にもあらぬ竹のよのはしに我身ハ成ぬへらなり

是ハ心の一へんにならぬ姓を嫌也、一切にわたれとも、猶学者の
思ふへき所也、仏者二世不得と云是也

世中ハいつれかさしてわかならん行とまるをそ宿とさたむる

此哥より下三首ハ、身心のはしめをハリをいへる哥也、此哥ハ身
のかたへとる也、世界は常住にして、その方所もなし、たゞ一身
来てすめは、しはしのやとり也、仍身の方へとる也、十界悉其分
くゝの住所」⁶¹也、しかれはいつくをさしてかさためたる所とハせん、
誰か又さして我物ともせんといふにや

あふ坂の嵐のかせハ寒けれとゆくゑしらねは侘つゝそぬる

此哥をハ心に取也、四大五行のあひあふさかゐを、あふさかとた
とへいふ也、嵐のかせとハ、無明の一念にひかれて、五行のあふ
さかあれば、有為転變の嵐も有也、只よのかけしくくるしき心を
いへり、此心ハはてしなく行衛もしらねは、此境界に侘つゝそな
といふ所、心のしる所なれば、心にとるなり

風の上にありかさためぬ塵の身ハ行末もしらす成ぬへら也

以前の二首ハ身心の二也、此哥ハ二のはてをいへる」⁶¹哥也、風の
上の塵とハ風大地也、塵ハ大地也、水火を風塵にもたせたる也、

人の身は風にもたれてかるき物なり、四大所成に生して、老病死にうつりて、つゝみに行衛しらす成ぬるの心也、但空に帰するとみるハ、二乗の見也、生死ともに常住也、是法位等の心也、一切衆生天地万物五行にはなるゝ事なし

こよろきの磯立ならしいそなつむめさしぬらすなおきにをれなみたゝいやしく身を持って、大家に遠さかれと也

かひかねをさやにもみしかけゝれなくよこほりふせるさやの中山

山ハさはりの義なり、さやにもみしかとハ自性の心也、けゝれなくハ凡心也、よく工夫すへし、本来の自性^{62オ}をねかふ義の教也

(一行分空白)

一此抄をば小点之抄共戒門共自記共又高記とも自説といへるに、其心侍へしとそ可受御説

(八行分空白)^{62ウ}

(半丁分空白)^{63オ}

古今集少々 安秘抄トモ号ス

京極中納言僻案題事、表心古今集歌注給卑下也、表義ハ甚深不可説、秘密したる心也、古今二字事古謂者無分別処を云也、是を黒と指今謂者明と境に知を云へり、是を白と指、黒白二色也、但五色八色の色に非思惟之

袖ひちてむすひし水のこほれるを

隨時持身心即優喜不相着也

春たてハ花とやみえん

一切に推をする心の非正直をきらへる也^{63ウ}
心さしふかくそめてし

信一字をいへり、万物ハ心か所作なれば、水に氷の思ひをなして、炎天に江河をわたり、石に虎のおもひをなして、兎石に矢たつ事をえたり

春日野の飛火の野守

乱一字をいへり、其物得業一切可尋也

百千鳥さへつる春ハ

百千鳥ハ万物の譬喩也、あらたまるとハ転変なり、我そ故行ハ老

つゝみのかれぬ理也

春くれは雁かへる也

白雲の道不乱直教也^{64オ}

春の夜のやみハあやなし

心の僻をかへすをいましめたる也

誰しかもとめて折つる

かくす事をみんともとむるハ非直、万物に心をまかせて、和をも

とゝすへし、如此時自然に天真を得也

梅花春くハゝれる

人の程に随而満足の思をなすへき也、欲心のいましめ也

いさ桜我もちりなん

盛者必衰会者定難を可観

ことならはさかさやハあらぬ^{64ウ}

諸悪莫作修善奉行の心也

春風ハ花のあたりを

悪者にちかつかされと云心也

まてといふにちらてしとまる

休心念慮に散乱も執をきらふ也

みわ山をしかもかくすか

児聖人の身をかくして、世に住事あり、必尋求へきの教也

いさけふハ春の山へに

きよくいさきよき物ハ、かりそめにもけかるゝ事なし、此心和光

同塵にちかひあり^{65オ}

春ことに花のさかりハ

世間ハ動得去来もなき実相常住なれと、如此思^{つて}とる悟に、相続命
大切なると也、覺と不覺とをあひみん事ハ命なりけりといふなり

花のことよのつねならは

花をハ道喩、道常住なれと、持者心地下劣によりて、古今のへた
て有也、元来不二路也

駒なへていさみにゆかん

古郷ハ道零落を云也、下句失実所たとへ也

おもふとち春の山へに

思ふとち和心也、春山ハ万物根源也、そこともいはぬ^{65ツ}は、不思議
玄妙境也、旅ねしてしかは稽古門也

郭公ななく里の

嫉妬きやうまんの心をいましむるなり

やよやまで山ほとゝきす

無常無我と観して、居やすらんと求るゝろあるへからず

五月雨の空もところ

其事に当て、時義を不知を教哥也、空もところ^ろに時鳥鳴さま悪所
也

昔へや今も恋しき

我昔をおもふとて、無心の時鳥に心を付ていふ也^{66オ}愁ある時他喜を
不知、喜の時他愁を忘るいましめ也、仁心を可思にこそ

木の間よりもりくる月の

木の間の滋ハ悪心也、月ハ善心也、一向の迷人にハあらで、少知
のさまたけなるを心直と云也

いつはとハ時はわかねと

本来自性ハ如とたるを、かりにわか縁にひかれて造作する心也、
いつはとハと云ハ無明亡念起時分をささゝる義なり

白雲にはねうちかはし

凡聖雜乱しても各別なる喩也、雁は凡也、月ハ^{66ツ}聖なり
我門にいなおほせ鳥

吾門は日本秋津洲を云也、いなおほせ鳥ハ男女交和也、此時一露
次第に成就し、我身を満足して、見聞覚知、造作出来也、此哥人
と元初をいへり、可凝観知

秋萩にうらひれをれは

心の慈悲のさまをいへる哥也、依気世間法ハ自在也
折てみはたちそしぬへき

着心をいましめ也

雪ふれは冬こもりせる^{67オ}

時節盛喩也、一心不調してハ、和と道との不立といふなり
すかる鳴秋の萩原

世のうつろひゆきせまる心也、秋をハ愁の方へ取也、旅行人とハ
生死のさかひに迷人の事なり、かくせまりうつろひ行世のかきり

を、いつとかまたんとあはれむなり

朝なけにみへき君とし

寄忍入、無為真実報忍者の心にや

人やりの道ならなくに

一切けたいの心をいましめたる也、つとむる心67ウ「道立所也

いさゝめに時まつまにそ

一生百年只夢中也、此間につたなき心を人にみえぬると恥思教なり

春霞なかしかよひち

霞ハ闇迷なり、悪縁にひかれて、多工夫用心の無曲事あり、稽古

者の用心也、雁帰を縁にひかるゝ譬也

時鳥なくやさ月の

善悪ともに道の理なき所に、上古聖賢弊イ善す也

立かへり哀とそおもふ68オ

我身をかへりみ思慮を守とし、礼義をたゝしくふるまふへきなり

夕暮ハ雲のはたてに

ゆふ暮の雲のはたてハ、不測不思議所也、物そおもふは凝思修行

也、天津空なる人を恋とハ、天照大神天真内証自在門也

我そのゝ梅のほつえ

落居不思議教也

いて吾を人などかめそ

一切思甚時失正理を教なり

あは雪のたまればかてに68ウ

世間事のやくなきに心をかけて、正直天真之理に達教なり、仏教

三界無安猶如火宅など説給心也、一大事因縁外更何をか心かけんや

よるへなみ身をこそ遠く

よるへなみハ世にたつきなき義也、さしはなたれたる君のかけを

へつらふ心をいさむるの教也、只自然道を可思

大かたハ我名もみなと

ならぬ事にもなふましき也、名にハよるへからず、心にこそ思

ひつくへけれといへり、三界唯一心の理歟

あつさ弓ひきのゝつゝら69オ

吾おもふにそへて、末にわさあひの出来の心也、是思立一念上に

用捨者也

曉の鳴のはねかき

曉ハ明闇境也、鳴のはねかきハ我身迷亡苦勞也、君とハ君子也、

道也、道則非他心いたらさる時ハ、道不成也、されは迷亡の苦執

ハ、即おのれかくるしむ也、尤可仰

今しはと侘にし物を

不運身上にも必兼て善相有是可契、不運ハ前世宿縁也、善相ハ一

世依信仏神利正也、信力にハ身を卑下すへからず、さゝかにハ兼

顕善相也69ウ

あはれともうしとも

善悪楽本主なきを、涙ハ何より落と還見たる也、觀普賢經云、我

心自空罪福無主觀心無心法不住法

水の面にしつく花の色

心性一片たとへ也、人として執を不留といはん、尤あるへからず

色も香も昔の

過事をとゞめされといふなり

玉たれのかかめやいつら

人の賤によらず、心地によりて、出身するをいへる也、されハ人

をいやしむへからず、学則庶人子成公卿の「心也」^{70オ}

老ぬとてなとか我身を

学道八年劫積て、その徳をます也、然者老をなけくましき也

さゝの葉にふりつむ雪の

薄ハ一身哀事也、雪ハ日月を送義也、はかなき世俗に、いたつら

に身の老下をなけく也

老ぬれハさらぬ別の

老学の方へ取也、君とハ仁也、人ハ必死理のかれぬに、その間に

学をして、仁の道を可修と也

しりにけんきゝてもいとへ」^{70ッ}

風波のことくさはき、糸のことくみたれかハしき世をしりえて、

のかれぬといへり、猷離穢土の仏教も此心歟

世中のうけくにあきぬ

世憂ハ我執による也、我憂世をいとはんとするは、弥あしき也、

しかし無我ならんにハと教也

木にもあらず草にもあらぬ

木にも非ハ陽也、草にも非ハ陰也、非陽非陰非陰陽不二はしに我

身といへるは、陽陰不思議境界を指也、不思議法は不出陽不出陰

也、是即天真惣躰也

世中ハいつれかさして」^{71オ}

識法境の身を云也、識身を離て法界太性はなし、菩提心論ニ父母

新生身即証大覺位といへる是也、哥道も陰陽不思議と指則此心也、

陰陽二気合一滴露となるこゝを離て、天照大神と云ハなき也、面

の心はまつあさく身にあたるやうなれと、此哥至極旨也

あふさかの嵐のかせハ

行末しらねは、わふると云ハ自性如たる所不可説なりと、説教し

たる也、業哥なり

風の上にありかさためぬ

意業思慮したる哥也、一首心五大つゝにかりなる「物也」^{71ッ}、行衛もし

らすと観したる也、此哥身をよめるやうなれと、前の哥身也、是

ハ五大をよめる也、前身は悟証身を云是迷亡奥の五大を教たり、

かくて此三首身口意三業に当也と口伝也」^{72オ}

(九行分空白」^{72オ}

(半丁分空白」^{72ッ}

口脾陰 地土 風のうへに 黄中土用苦 法界性智

耳腎陰 水水 ありかさためぬ 黒北冬鹹 或所作智

身ハアナカチ水ナラネト爰ニ水ト用也、五ニ合故也

舌心陽 火火 ちりの身ハ 赤南憂甘 平等性智

鼻肺陰 風金 行多もしらす 白西秋辛 妙觀察智

陽トモニアリ

眼肝陽 空木 なりぬへら也 青東春酸 大円鏡智」^{73オ}

こよろきの磯立ならし

いやしく身を持って、大家に遠さかれと也

(二行分空白)

かひかねをさやにもみしか

さやにもみしかハ正直明鏡也、横折臥せるさやの中山ハ、凡濁影

形也、横折といへる邪曲の正直に対義、然其本来清浄の明鏡は、

邪正をそむかず、影にうつして明白也、是則天真不思議也、この

天真元来自身に明白也、身横折邪曲なれハ、元来の天真鏡曇一度

邪曲やふれて、天地明とたる鏡あらハる、あらはれて後ハ、神も

正も凡聖も迷悟も仏も衆生も人も、⁷³をのつから一切の物と皆悉

明清不思議にして断せず、動せず、无にあらす、有にあらす、中

にあらす、非有にあらす、非无にあらす、是則吾道天真不思議妙

鏡天照大神内証也、此故此抄終末にこれをのす、深是を可觀凝猶

筆舌ニ不及、舌語も不通者也

以上哥六十首

此抄題名事、小点抄と云、又云教戒門ともなづく、自記とも云也、

猶聞口伝者也

(三行分空白)^{74オ}

三部書口伝 五ヶ条

詠歌大概

情以新為先

本より情をあたらしくするとて、情のともかくにも成にハ侍らし、

た、風情を新しく可旋、其風情とハ常住見のしたてのさしきなれとも、

みかき付の屏風をたて、見事の三具足を⁷⁵けハ、あらぬ物に見なす

也、いかにも風情をかへて、同昔の詞にて可詠也、かくあるを真実

情をかゆれハ、異風異躰の未来記に成也、奥義の秘密口伝也、風情

新に成ぬれば、心ハ新成て、物ことに明白也、朝夕各と心は一にあ
らす、此ことハりを思ひ^{74ウ}しるへし

猶案之

同秀哥の内にも、文有秀哥一句誰故わるかるへし、然間猶案之、

是又口伝也、可秘

ほの⁷⁵哥 桜ちる木の下などの類を文ある秀哥と云也、矢田の野

に浅茅色付などハ、た⁷⁶秀哥なれハ、とるに難なき也

人麿 貫之 忠岑 小町 伊勢之類 菅家 猿丸 遍昭 素性

深養父 是等を類と云也、口伝可秘云々

和歌無師匠、心を種とする間いへり、又云心より出して、^{75オ}みつか

らさとる物也、此文に合なり、是口伝也、秘と密と只以旧哥為師、

詞を見習はんか為也、口伝也、秘密云

百人一首 二ヶ条

衆鳥同林遊とて此百首ハ躰姿雖替位は齊かるへし、巻頭巻軸上古と

今日とひとしきなるへし、上古も往事の心也、今日の順徳院の御詠

も往事の心也、しかもひとつ物也、少もかはりめあるましき由慥庭

訓也、然共事をわけていふ時、ふるき軒はの忍ふにも猶あまりある

などいへる、文花をかされり、如此風情のかはりめ也、上古と今日

とを此両首の御製を以心得侍る也、返と巻軸の哥上古よりハ、詞風

情一也といへとも、^{75ウ}文花をかされる内慥口伝し侍也、此巻頭ハ上

中下の世二叶哥也、人に是を心かけてよむへし、巻軸の哥ハ建保・

建仁の比より用るといへとも、上古もあり、仮令をる人とは是を用て、

巻頭の躰を不知者也、此二首にて人の歌のよしあしをも見しるへし

とそ

未来記 一ヶ条

此書を関書といへり、哥を詠する時の心ハ、しうわうむけなる物にてあれとも、心も詞も風情も風躰も此書の余なるへし、努と此事を学へからず、此書を心の関として爰へ心の来らんをはのそくへし、是ハ秘密奥義口伝也^{76オ}」

近来秀哥云 一ヶ条

心より出てみつからさとする物也と云に、詠哥之大概に云、和歌無師匠、只以旧哥為師といへり、是こそ心より出て、みつからさとする云、此書の口伝の意得なれと、慥秘伝

詠哥一躰之内ニ 一ヶ度

日も暮ぬ人もかへりぬ山里ハみねのあらしのをとハかりして日くるれば逢人もなしまさきちる峯の風の音はかりしてゆら／＼と聞ゆはしもよき哥とてそ、後拾遺にハ入たららめと、猶まさきのかつらハ心引すちにて侍にや、この詠両首の趣又詞共に口伝也、前ハ基俊の詠、奥には俊頼朝臣の哥也、おくの哥を心の引すちと申侍、^{77ウ}「尤面白き也、故ハ当世詠哥なれば、文花をかさる所多し、然る間心の引すちとハ云也、前ハ古躰なり、是百人一首の巻頭と巻軸ほとのかはりめ也
尤詠哥一躰の秘密口伝也

愚問賢注 一ヶ条

哥ハ人物いまたさたまさるさきより其旨存せり、といへとも二義相別て、六義又おこれり、未顕人躰前の心を、其旨存せりといへり、二義相別てとハ、天地の開たるを云也、六義趣事ハ天地ひらくれハ、主あり、主あれば、六義もおこりたるなり。愚問賢注口伝也^{78オ}」

伊勢物語口伝 自松月庵相伝の分、伊勢物語の分説也

伊勢物語尾張のあはひ同号題、伊勢ハ男女也、彼契のをはりといへり、もとしそく成ければ、齋宮のはらに師尚生たる事をいへり恋しくハきてもみよかし千はやふる神のいさむる道ならなくに恋をするを神のきらふにあらす、とんする所の念をきらふなり、然る間神のいさむるといへり

鳴のおほきさ漢高祖を司宜と云ハ、百官の位をよろしくせしかハ、司よろしき公といへり、具巨細ハ古注にみえたり、高祖のかほなかくありけり、今の陽成天皇もかほの少なかりけれハ、しきのおほきさといへり、つゝあつ^{78ウ}の「詞五なり、男女交会の道ハ、七歳より互に其いかななり、然者七歳よりハいみ服有也、是ハ五歳より男も女も共に心のある間、ともに五歳と云心を詞五といへり

昔といふ事、いさなきいさなみのみこと、天のさかほこにて此国をさくりて、此国はしまりて男女交会の道出来しぬれば、依之廿一日に国をさくり出す、其日をくつして、昔とかけり、しかあれハ此物語の始に置也

我上に露そ置なる天河戸わたる舟のかひのしつくか
露を忍露といへは、この難有、御忍ハ若天河をこく舟の其かひのしつくかと、うれしき事の甚しきにたとへたるなり、たとへハ是ハ中将の勅勘に深思しつめるを、^{79オ}「忠仁公の染殿へ侍もて、少御れんみむの文のあるを、面にをしあてゝみたるを、面に水そゝきなどとしてといへり、返と哥の心も忠仁公染殿の御れんみんの御詞を悦よめる也とそ、時世へて久敷成にければ、其人の名忘にけりとハ、天照大神の住吉大明神と化し給、住吉又人丸と成、人丸又羽林となり給な

り、和光同塵の久して、天照大神三躰身之処遠をいへり、おんやう
しかんなき神位、是ハ我國に生るものは、男女きやうくわいの道を
以專とするに、其恋をやめ給へと中將のいのれハ、神のなき給とい
へり、神も此道以衆生たすけ給理也、秘之口伝也

思ふをおもはぬをもけちめ見せぬとハ、慈眼視^{79ウ}衆生福聚海無量、
此文を以此口伝に合也、観音の大悲の力のいたらぬくもなきを、中
將のけちめみせぬ心に合なり、秘と口伝也、是ハ三ヶの大事の余三
ヶ之口伝にて候也

月のおほろといふ事

(四行分空白)

出題之内雜始・雜中・雜終

天地人三才にあて、始と云事にハ、雲月日星^{80オ}天部類を可詠中と云
にハ、松竹山河是又地義を可詠云と、終といふは人事を可詠也、秘
と口伝也、魔にかされぬ深秘之事

内伝印

千はやふる我心よりなすわさをいつれの神かよそにみるへき

是也、太神之御哥也、古今の二字にあつる時古字也、内伝の印の心
也、外伝の印にてする時ハ、やかて今の時にあつる也、其時は物と
に可有やうなる無事をいへり、同前古今明白なり、さて内外の印を
高云時、延喜貫之起もおこらぬ処也、位云時延喜貫之古今千首を撰
所也と云と、此一ヶ条安子伝^{80ウ}

古今短哥事

万葉ハ以長哥為本、古今ハ以卅一字為本、然れ共貫之古哥奉し時の
目錄のその長哥とかけり、万葉をうつす事、如此うつせる也、これ

はあかれる世の治れるめてたさを、今うつすといふ心にや、然れ共
句みしかければ、短哥といふとそ

同集廿卷奥哥

千はやふるかもの社の姫子松、此哥月いてんとて八月し詠みえ、う
れしき事あらんとてハ蜘蛛さかる、悪事あらんとてハ恠あり、吉事
のあらんと思ふ時、此哥を念すれハ、そのうれしき事必成就する也、
以此哥此集の眼^{81オ}とする也、能と染心可観と口伝也

短哥事

長くさま／＼にいひつゝけたれとも、末ハ必卅一字の哥にて終也、
故に短哥と云歟、然れ共、又長く書つらねたれは長哥と云也、又長
哥の初の五文字と末卅一字にあふ也、返とそのむねひろしといへと
も、末卅一字に終れハ、短哥と云也、然る間、長哥を詠する時ハ、
末の卅一字をむねとするやうに詠する也と云と、此一ヶ条宗順房相伝
之分

同集誹諧事

非道にして正道也、非正道して妙義也^云と、是為土台面あるを云也、
東方朔^{81ウ}といへる者のさるかくするをみて「いへる事有、彼者せいひき
し、然間云様今日我徳をしるといへり、雨のをそくあたりてぬれぬ
と云と、則此語御門聞召て、雨にをそくそうの、物のぬれぬやうに
をいをせられけるとなん、此事史記の滑稽伝にありとこゝろをと
つて書之、此事誹諧似なり、実にあらすてし^{82ウ}正儀也

まめなれと何そハよけかかるかやの、などいへるも、打聞されはめ
るやうなれと実也、又彼東方朔か事も云さま、されハして共に、御
門雨にあたらぬやうに、惣の者をさせ給へは、人をたすけたり、此

誹諧も非実して此心有也、口伝也宗順房相伝之分^{82オ}

みたりの翁の事

住吉明神也、うハつゝを・なかつゝを・そこつゝをとて三社なり、是をみたりといふ内義哥道本尊として、この道をまもり給ぬ、是のみならず、諸人の願をはやくかなへ給事諸神に勝たり、又是のみならず、後生をも仏果菩提にはやくいたらしめ給ふなり、此三徳をあけてみたりといへり、別義ハ外奥の義ハ内也、内外も在と云^{宗順房相伝分}

一天照大神みそきをしたまふ時よれる也、是則云所同前、上中底三にわかてり、故にうハつゝを・中つゝを・底つゝを也、家にて始名付^{御玉平也}所高貴大明神なり、是住吉別名也、住吉に御在す前の尊号高貴也、みたり口伝十合国満^{82ウ}大神の御祓により給へは、三足と三にたると云也、深秘之

一古今集巻頭歌事 元方哥不巻頭、是家口伝也

序分也、年内立春心也、年中を兼て、貫之の袖ひちての哥を巻頭と用也、秘之

一我門の板井の清水、是は万の人のいろへは、水のにこるにや、此哥の此義秘説也

一しもとゆふかつらき山に、此哥も万事人界のことわさの此退転を怨みいましめたる心也、まなく時なくふることく、断絶なかるへしと云、此説秘説也、不可免記

一住吉岸の忘草の事 此忘草古来さまく説あり、然れ共是ハ只草也、彼岸波あらくして、生ぬる草の^{83オ}「たまらず跡なきを忘草といへり、是

宗順伝

又此草卯つきなりと云、そのゆへハ是玉姫海の道をとゝめ、離宮

に帰し時、彼岸に彼木をさして別しゆへに、此所にかきりて忘草といふと云、此一説ハ道曉伝

一^{是宗順伝}百人一首に清角抄といふ題号あり、是為氏卿の説、此心ハ一切獣の角ハ一ある物也、此百人一首道と読かたとをかねたれハ、題号すといへり、清ハほめたる心也

一花の色ハあはれなり、我身のはてや此兩首にて、小町か一期ハはてたると云、是又宗順之伝

文明十年八月廿三日題号口伝、先日病中也

古^{文人}人^{延喜} 今^{延喜} 後^{延喜} 撰^{古今よりて云也}天曆^{83ウ}御代^{拾遺}

一典侍藤原直子朝臣、此哥不限恋万事人ハ一心可成事を作者詠也、然間万人も此哥を可守也と、作者一切衆生を慈悲する心あるによりて、直子といふは仏一切衆生を如一子あはれみ給ふに、思ひよせて子と云、直ハ彼作者の詠の心也と云、宗順伝

一古今集の哥、義理を取事大事也、亡父云、小町・伊勢哥合を番時毎首小町を右にせらるゝ時、御夢に御門に奉対恨申云、每首右になさるゝ事如何、哥詠ハ没後をこそ執するにと申て奉見と云、左右をさへ如此執心する也、ましてまさしく読たる哥の正意を^{84オウイ}「たへは、必作者可有限、然間正意に可叶様に義を可取也、其正意に可叶様ハ、正直門に入て、不曲つゝしみ義を可取也 宗順伝

一京極黄門哥ことに本哥を取事、我力と古哥との二のゆうにて作間、哥作と云也、しかも上古をうつす事、尤今の肝心なりと云、宗順伝

一古今之詠いつれの所にてあたるといふ事、神哥も社頭いかきの詠と云事なし、たゝ神の詠也、然者古今惣躰の詠とならふ也と云、道

曉伝

一秋哥下に定家勸云、此哥之注人丸哥也、諸本又同と云、注といふ事肝心也、故如何となれハ、文武の御哥84ウ書なる、名字をあらはせと二に成也、一躰と心えさせんため也、序云、君も人も身をあはせたりとなん云、君臣合躰義也、道曉伝

一鬼神と云事、あら人神・天神などの事を鬼といふ、神は神代よりのを指て云也

一なすらへてとすめは、たとへ哥にまきるゝ間、てとこる也、たとへて云よりなすらへはかりハ、ほのかなる心と可心得也

一切紙の上口伝道曉伝

一三ヶ事

をか玉の木 河名草 妻戸にけつり花85オ

一としは 一河骨 一つま戸

二内侍所 二宝劍 二神

三内侍所にとしはを比する事ハ、鷹狩の鳥を木に付を云也、鳥は玉しぬによする也、木にかくる事、鏡を袖に付に比之

三宝劍に河骨を比する事ハ、清水に生出て、水にも土にもかされぬ所を、宝劍に比之

三神は玉也、比するゆへハ二条の后国母にましゝて、天下の主の御母なれば、かれに心得也

右如此三ヶ大事 三重口伝なり

一吉野山の桜の切替事、如此一大事を事あらはせは、道85ウのためかろきゆへに、古今にハ不書之、然共てつしよなくてハ、いかゝなる間、彼哥を勸て切替すと云

一ほのゝの哥の事、五躰にあて、生老病死に取事、此まゝ可心得面

に是をいへは、哥の本意なし、此事用義なれば、切替になす者也

切紙上口伝

一をか玉木事 片野のみかりに鳥を付てたてまつるとしハと云木と云事、鳥を付といふ故也、鳥ハ玉しぬの鏡を付たり、是表の義なりと云、畢竟重の大事の時、内侍所に比する也常光院へとは角 当流神木を用也

二めとにけつり花の事 めとにハ妻戸の事なり、種86オの「花をけつりて、妻戸にかさしす也、口伝如此、妻戸にけつり花をさしてかくる時節ある也、その故は朝帝国母にまします、二条后に奉比此大徳のゆへ也、畢竟重の大事の時神璽に比する也

三河名草 河ほねといふ草也、是口伝也、此草をハ宝劍に比したり、

劍ハ水を躰とす、河の水に、この草生出たるによせて、かくいへり、

水にもをかされず花さく也

四重の大事 此切替ハ前の三ヶを神璽・宝劍・内侍所に比する子細をあかしたる也、仮令前の三ヶハたとへなり、三種の神器をいはんためなりと云

内侍所は鏡也、真諦中の三をそなへり内侍所「読共心86ウ」本躰ハ空空にして、万象をそなへたり、此理正道自ラ正直なる物也、畢竟一切は正直よりおこる間、これ一大事なり

宝劍宝劍天下惣して劍ハ本水躰也、自水起劍と云、陰の形也、爰以征罰の根源本すと云

神璽これハ玉也、陰陽和合して玉となる也、神伐にも

(行頭ニ「神璽・慈悲 トアリ」天照大神と素戔鳴尊御中違の時、玉と劍を取かへ給て、御中なをりの事あり、陰陽和合表事也と云、至

極の口伝云、めとにけつり花ハ陰陽をかねたり、めとハ妻戸は門な

これは、陰の形に比す、けつり花ハ陽の形に比す、一切只爰を根本とする也と云、此三の宝^{87オ}をもつて、御門天下を持侍也、此三一もかけてハ不可叶、此三の宝も暫の事也、是ハ箱におさめても、正直・征罰・慈悲を御門の心にかけて給て、天下を平安におさめ給へきの表示の儀也、是ハ君一人の御うへのみにあらず、人と心にかけてハ、身をおさむへき教也、是を守侍らハ、上王道下万民にいたるまで、天照大神の御心と一躰なるへき物也

五三鳥大事別紙に有之

六吉野山桜の事、たゞ対して書事、甚深に面白事也と云、さりながら為証勘歎、此外別ニ無義、切帛の二首哥、猶前を可用とそ、如此そとしたるも、切紙の一の^{87ウ}口伝也とそ

七風躰之事

八雲立いつも八重垣、是ハやすらかにかろき也、誠に神代の大道の心也

ほの／＼とあかしの浦、これハ少重大かた大道すたれて、物のことほりをふかゝらんとし、ことのはをとゝのへなとする習也、されと此哥ハ、心さしのふかき思ひよりよめる哥なれハ、大道くたりてすたれたる世の義にハあらず、これ尤秘蔵之義とそ

梅花それともみえず 是ハほの／＼よりハかろく、八重かきよりハ少おもき也^{87オ}さをしかのつまどふ梅の花、同程のかろきなり、いつれも景氣に感したる哥也、惣して景氣の哥ハかろかるへし、待花・見花やうの題ハかろく、落花面白さまを思入へしとそ、問恋・逢恋ハ軽く、別の恋は重かるへし、四時も又如此、三躰のさまにて意得へし、但其題により其心あるへし、夕されは野への秋風、此哥ハ俊成

自撰の哥也とそ、風躰にも心詞にもかなへり、此の哥を三品末期にこしへの禪尼して、定家卿にの給ひける義有之、こぬ人を松ほの浦、是ハ古風の姿也、しかも詞など調りぬる哥也

ななき日のもりのしめ縄、これハ夕されはこぬ人を、など^{88ウ}よりハ軽し、夏の哥なれば也、此五文字五句にわたる也、人とハみすとやいはん、是をみつとやとなをされけるよし侍り、風躰の方へ入時ハ、みつとや也、心ハおなしかるへし、風流の方ハみすとやまさる也、四首のうち余に軽し、惣して風躰之事切帛に侍、哥の外三代宗匠の哥、是ハ撰集に入たる哥の事也、又詠哥大概の奥なる哥、百人一書・秀哥大躰、あかりての世ハ、亭子院御時后宮の前後哥合、紀氏新撰金玉集との哥を本とみるへし

八三才之事、是又切帛の上の外無別義、猶と人の世と成て、素戔鳴尊をあけたるハ、能心得させんための義也^{89オ}三才の起をいへり、面にかきいふへきにあらされは、切帛とすと云

九ほの／＼とあかしの浦の事、生老病死の四魔と云事、不可用之、嶋かくれハ、嶋の外へこきはなるゝと可心得之、則此家をさるの心也、此哥ほの／＼とあかしとつゝけて、明闇を云り、而已又明行かたへいへり、推の部^{89ウ}に入たる事甚深妙也、うき世の旅つゝにハ誰も本意の古郷に可帰よしにやとそ

十古哥事

いつくしきみかほにして、諸の人を見給ひてとハ、いかにも柔和にして人に向可給也、御宝と成てとハ、無事に^{89ウ}して諸人を見給ふ君の御心を御宝と云也、有為宝ハ暫の物なり、無事にして、万民を見給時、天下治如此之給御志かきりあらしと云心に、志ハかきりあら

しと云也、又人民も上をありかたく思ひ奉る事、限あらしと云也、
是ハ古哥の躰にて、文字のさたに不及、此心肝心の故に口伝す、秘
之

十一重之重

身仁邪奈久 他耳慈乎与

此事還無曲人思歎、真実まなひても不及、習てもたもたれぬ所也、
習くて我心腑ニ染給ふへき事ハ、此事にこそ、此外に身を立、国
をおさめ、家をおさ^{90オ}むへきことあらんや、自然者天性無欲なるも
のハ世に有共、他をめぐみ哀む心ハなき也、それは不可有曲とそ、
此心上一人より下万人におよほす也

十二此切昏土台といふ事

奉授

今上皇帝 和歌

神南日能 上桜花哥依綸言

是より哥をさつくる事始也、人丸文武天皇二道授奉りて、此哥を申
と也、是を知て、貫之延喜^{アキマ}へ、神南日の哥を奉授なり、就綸言上桜
花哥とハ、さらば汝も以自哥可申よし綸言によりて、桜花咲にけ^{90ウ}ら
しもの哥をさつけ奉ると也、此後万葉ハありながら、大様の物なれ
ハ、自撰哥の御沙汰をと思乍立所是より起一部の土台と習也、賀
部に素性と長くと入たる哥ハ、素性の哥にあらず、各々在之、如何
として作者なきそと云に、能書にて御屏風の哥書間、とりもつ心に
て素性と云之、我哥の様にしたる也、と面ハ心得也、別に口伝在之、
元来書落である歟と也、読人不知とあるへき也、されとも聖人のし
たる事なれば、かくして助なり

一 隱名作者延喜御哥

折つれば袖こそにほへ 今朝きなきまた旅なる^{91オ} 立田河錦をり
かく 時鳥なくや五月 かりとものおもひみたれて いつは
りと思ふ物から

短哥

あふ事のまれなる色に思ひそめ

以上七首

一 家切^{家切}躰之事、真躰と名字を不顕して、かりに名付たり、実にハ鏡の
事也と云、先是口伝也と云、鏡に名題をめつる心在之、先鏡天
台ニ云、所三諦即是の法文有、元来明所有諦無惣也、さて万象をう
つす所候諦也、有無の二に不渡して、而も二をそなへたる鏡の神な
り、是を中道実相とハ云り、然者二字に云所明断^{91ウ}本来無相の躰を
古と云へきにや、万象うつる所今となり、何として鏡に両字を比し
て、秘極とするといへる、天照大神の玉しゝハ鏡也、神道・神鏡の大
事と云にも、かゝとハ天照大神にかきらす、神にてまします也、神
とハ鏡を中略して云りと云、諸神の真神の鏡なれば、思去鏡と不
顕して、真躰と申所甚深也

一 法中方号題事 古自己 今目前

一 古哥御口伝 貫之 延喜ニ教奉也

一 大和舞 大和ハ和也、舞ハことわざ也

一 哀傷部ハ万のまことをしめしたる物なり、一切の有姓の理かりなれ
は、死におもむくを真実と云也^{92オ}

一 賀をハ不定に取也、なき事をいへり

一切紙事、昔ハ第一三ヶ、第二古哥、第三重

一今上御への事、御へとハ贄と云心也、御にへと心得事一往の義也と云、元慶の御にへと云也、当家口伝云、御うへと云心也、共に同之、但如此云とき、今上の御上と云ハ、いまのうへの御うへと云へきこと不審有之歟、乍去君のいみなハ、或下^{フリ}居時或御崩御後つけ奉也、然間今上とハ当今の御いみ名分と口伝す、今の上の御上と申といふ事、かくて無相違者也

一物名之事口伝也と云、棗拍伝大士頌云、有物先天地無形本寂寥為^二万象至^一ト、不遂四時凋為指南之^二禪云、所無住真人末生以前本来面目可等哉、元来虚無処に一言わかれぬを、しみて物と名付たり、不預形色にも非考にも不出者也、家と所を物とかりに名付云也、此物一起時、能万象主となるなり、考に出色不分といふ事なし、是人の心を種としてといふ所にも可当也

一かな序の詞にいふ、人の心とハ見聞に落たる心にあらず、天真虚無自然ノ理也

一多ひす哥詞をうつくしく調へすして、心のすちをさしめにいふ義とそ直心歟^{93オ}

一当流相統事 切紙在之

紀貫之

貫之延長元年癸未内侍受也

助内侍「女」内かいしやくの女也、号但馬、哥ハよます、只内侍かたより書をあつかりて年久護持す

女 是ハ但馬かする所ある物なり、江州に在之、彼但馬又新所の書を伝、

これも哥をよます

「女」 山法師之妻となる

女 山法師の妻の女也、是伝て前の文書を持也、從延長至永保

三百六十一年、此女房永保三^和受金吾也

基俊 奈良南円堂に哥道事被祈畢、依夢想大津に被尋、又大津八幡の御夢想此書を伝らるゝと云、是家之口伝也^二

一落ても水の哥にて四時を思心あり、然者其哥人の祈念在之、筆の及処にあらず、飛花落葉につきて共二可觀也、此二首ハ内外を平にする哥也、落ても水のハ陽の哥也、よしや世中ハ陰の哥也、此二首を内外にあつる事、故実^{別三言伝有}と云物也、此上に道といふ事あり、此心ある時道に邪ハなき也

一前の二首ハ身心を安する所を詮とするにや、且道事^和至無事極也、前兩首放下して、一身を安する事也、正ハもに住虫の哥なるへし

一婦一本名此界、天地未分万物未起と云ハ、天地も万物も元来有物なれと、二神の天とさし、地と名付草^{木と云}と云、海山とよひそめしを、うみいたすとハ云也、無分別の所を未分とハ云也、分別の時^は則無分別か形也、愛をさして古といふなり、大易ハ未見氣と云心也、あしかひのことしと云よりハ今の心也、大初ハ氣のはしめと云心也、是より大始・大素など物の明になる義也

一和の根源ハ只無我也、無我なれば和ハよく至なり、我を破するハ我を立する理也、仏の隨器應器の心只無我也、衆生に和するの義也、此無我を天子に授たてまつり、道を行ける人在之、此君臣可尋之、古へ今にこれありけるなるへし 口伝柿紀

一此集の巻を取合て次第する事在之、四季一卷」私家94ウにハ春夏と秋冬と二巻に心得るなり、兩儀終に同意也、賀一卷是八万の時儀となる也、離別・羈旅一卷 物名一卷五に通用する巻也、仍十巻同にをく也、恋・哀傷よしや世中に合て為一卷、雜上下・雜躰廿巻合為一卷、廿巻ハ天真也、天真は自然なり

雜躰の三の内にハ、短哥本となる余ハ此下による也

一人丸名哥多内に、立田河を随一とする故在之

一人麿住吉明神化身也、秘之

一是よりさきの哥、是よりとハ延喜御代を云也、さきの哥とハ万葉なりと云95オ

一人丸・赤人等同と云事也、位正三位也、御門の御師範なり、かた／＼赤人不可及、よみかたにをきての事也、私家義也と云

一あまのかるもに住虫 此むしハ衆生蠢と心也、此躰と云物四大五蘊をまろめてより、色相にむすほるゝハ、境によりての事と思ハ迷心也、境とハ世界なり、又境に躰元来なき也、一身不生万法不躰云是也、人にとかあるによつて法度といふ事も侍也、されはたゝ我から也、此我といふ事衆生の上のみにあらず、天地にも又あるへし、すめるのはほつて天となるも、天の我から也、地もおなしかるへし、青黄赤白黒も各の我からの色也、95ツ此后むかしかゝるふるまひある事もなし、それも我から也、悪ふるまひあるも我から也、思ひとりて世をはうらみしと思返も我から也、されハ此哥道に当断の肝心也、直不直は只一心也、典侍直子ハ作者也と口伝す、此名につきてもおもひさとするへし、作者ハ皆我ほとよりはさけてかく事常習也、此哥ハ先をろかなる所をたてゝ、是を思ひあきらむる心とぞ、此哥此集

の眼目といへり、大方に不可思

三鳥之切紙口伝云

一もゝ千鳥さへつる春は

さへつる春とハ、万物の形色声の心也、あらたまるとハ96オ是法住法位世間相常住の心也、我そふりぬるとハ、有待の身の義也、此身は二度立帰て、あらたまる事なくて、ふりぬる物也、世界ハ我といふ物なき時は、常住也、我といふ物に、一切の喜妬愛樂あるによつて、終に衰老のなげきも有也、可思悟なり、四に簡を可思也

一をちこちのたつきもしらぬ

山中ハ世間のたとへ、一須弥の間也、物の高き事とふかき事をハ山にたとふる事、常の習也、おもんはかる所のなきは、たかふかき理也、此山中もその心也、をちこちのたつきもしらぬとハ、大空寂所也、爰にハ又、元来96ツ遠近高下の分別なし、おほつかなくもとハ、自然によひ出されて、遠近のたつきも侍也、不可得意也、よひ出す物は、元初の無明也、能可思量、此よひ出されたる、則国ノ常立尊なり

一我門にいなおほせ鳥

吾門とハ人と開たる心也、陰陽和合して、五躰をまろめたる所を、鳥とハなすらへたる也、書に鷄子のことしと云心也、取あつめたる心にも通也、事わさのはしまるを、鳴なへにとハ云也、今朝とハ端的の義也、風と雁とハ、隱題の二の万端に、世の造作なる心なり一物名に鶯を第一にをく事、鶯ハ雪の内より春97オの「氣を知て、時に感する鳥也、何とてといへは、この巻はことに心を取詮とすれば、如此第一に置也

一玉たれのこかめ 玉たれのこかめほめたる心にてハ心不叶也、たとへ少人家に会の心なれば、たゞ何ともなくて風俗の哥なれハ、おとしつけたる也

一未來記口伝云、前和哥得業生柿本貫躬と云々、此作者のさま此哥の躰也、面ハつゞきたるやうにて、悉きれ〜なり、柿本貫躬格別の事也、黄門奇特のあてかひ也

一先師柿本大夫、紀貫之かために云にあらす、惣別の今日の哥人も、こゝを先師と仰といふ事可有義歟、此心（97ウ）にて貫之先師と云義もあるへし

一私家義富士山煙事、二条不断冷泉不立と各子細被申立、雖然私家と両家別れぬ以前（95オ） 中院（95カ） 奉相伝間、両義共二用侍由口伝也、二条二ハ後拾遺抄哥、さひしさに煙をたにもたえしとて柴折くふる冬の山里、是等哥証にひく、それのみならず、古来富士の煙ハ不断由多義也、又冷泉方にハ、不立と云心先祝言の心也、此山煙ハ人の思によりてたてハ、山の煙不立ハ国土思の无なるへし、さる間不立を可用と云々、然而私家両義用るといひながら、代々氏村已来二条家門弟と成て、二条流義を（98オ）二面に立間不断用也、されハ冷泉不立ハ無本意歟、然共家義不立にもそむかされは、私家に一義を立云々、口伝云、彼煙立不立をはいはて、思はなくなると云也、煙不立ハ思無心也、たとへハ富士の煙ハ、枕詞のよしに用也、同序云、かた糸のより〜に不絶、呉竹の代とにきこゆるといふかことし、されは富士の山・

なからの橋、詞のかさりにて人思ハ無道ハ絶ぬよし也、下にハ冷泉のいふことくに、意得と二条家によるに付て、不立を拾義勢なり

一家と義他家相違之条々

十二 富士の煙の事 口伝 十四 御への事口伝（98ウ）

十五 おか玉の木の事 口伝 四 おこきの事 御国忌 六 こきと可読

一まとふ まよふと所によりて可読

二 この花 一三 ちりひち ちりいんちと可読

三 雲林院 うりんぬんとよむへし

十一 七月六日 ふつき六日とよむへし

九 みこにおまし〜をはしましとよむへし

八 色みえて て文字を澄て読也

七 うれはしきこと 事といふ字に云也、然清て読也

一五 我身世にふるなかも 霜雨の事に雨をみて、我身に比也

一人丸赤人勝劣事 子細前にあり

十一 卷頭 卷軸（99オ） 以上

一 始終哥と云事有之、始ハ卷頭、終ハ吉野の河のよしや世中の哥也、当家ハ祭の事也と云々

一 奈良の御時文武天皇也、但甚深口伝あり、まことは貫之かきあやまつなり、平城天皇を奈良と被心得歟、百年にあまり十代にあふ事、此御代の時無相違、然共序詞云、彼御時におほきみの位柿本人丸なん哥のひしりと云々、太時代平城にてハ相違者也、所詮貫之あやまりを秘して、文武と云事必定歟、彼集にも貞観の御時、万葉集はいつはかりつくれるそと、ハせ給ふとかけり、彼御時さへ万葉の事不分明、これに（99ウ）よりて定家卿観見して文武と被付、まさしく人丸の師匠にまじり給御門文武也、奈良とハ久しき事などの様に可心得、また文武の陵ならにまします間、それにもなすらふへき歟

一いにしへを仰て、今を恋さらめ、かもといへる古今の兩字を云也
一同序に人の心を種としてといへるハ、古に当方のことのはとそなれ
りけると云ハ、今に当侍也

一十八首秘哥事 別紙に此哥目錄ありといへり、少と義理等注付侍ら
んために書之、此集尤肝心也と云

春哥

桜花咲にけらしも足引の山のかひよりみゆるしらくも^{100オ}

此哥ハ表理義無之、よみ方肝心也

枝よりもあたに散にし花なれば落とも水のあはとこそそなれ

人々浮世の理深可観念にこそ

夏哥

我宿の池の藤波咲にけり山ほととぎすいつかきなかん人丸

此哥も詠方の本なるへし

やよやまで山時鳥ことつてん我世中に住わひぬとよ見具仁町

是又穢土をいとひ、浄土をねかふ心もありぬへき歟、よくく可

観之

河風の涼しくもある打よする波とともや秋ハ立らん貫之

此哥又詠方の本なるへし^{100ッ}

侘人のわきて立よる木の本ハたのむかけなく紅葉ちりけり遍昭

この哥ものゝ不運なる躰如此者也

山里ハ冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬと思へハ宗宇

此哥又よみかたの本なるへし

昨日といひ今日とくらしてあすか河なかれてはやき月日也けり列樹

いたつらに過る月日ハおもほえて花みてくらす春そすくなき興風

この兩首ハ有為轉變理にや、深可観之

千鳥なくさほの河霧立ぬらし山の木の葉も色まさりゆく忠岑

此哥又よみかたの本也

命たに心かなふ物ならハなにかわかれのかなしからまし

この歌又其意有歟、深可観之^{101オ}

結ふ手の雲ににこる山のみのあかても人に別ぬる哉貫之

此哥又よみかたの本也

唐衣きつゝなれにし妻しあれハはるくきぬる旅をしそおもふ業平

この哥詠方の本也

心から花のしづくにそほちつゝうくひすとのみ鳥の鳴らむ敏行

此兩首又可有其心、可観之

足引の山たちはなれ行雲のやとり定めぬ世にこそ有けしけかけ

この哥詠方の本也

あはぬ夜のふる白雪とつもりなハ我さへともにけぬへき物を人丸

此哥も詠方の本なり^{101ッ}

あまのかるもにすむ虫の我からとねをこそなかも世をうらみし直

子

此哥又道の重事也、深可観之、此哥まで十八首の秘哥なり

花よりも人こそあたに成にけれいつれをさきにこひんとかみし茂行

此哥詠方の本也

大方八月をもめてし是そこのつもれハ人の老となるもの業平

此哥同前

風の上にありか定めぬちりの身ハゆくゑもしらす成ぬへら也蟬丸

身誹諸哥ハ捨つ心をたにもはふらさしつゐにハイかゝなるとしなへて興
風

此両首又その意あるをや、尤深可觀之

廿卷あふみよりふみより朝たちくれはうねの野にたつそ鳴なる明ぬこの夜ハ読

人102オ

つづくはねの峯のみちはおちつもるもしらぬもなへてかなしも

此哥兩首同前 以上内外口伝共 廿四首

一延喜御製事先人心しるしに被付本以写之

宗祇申所哥数少可用之、但又不可弈

折春上つれハ袖こそほへ 今同下もかもさき匂ふらん

け夏さなきいまた 物秋上ことに秋そかなしき

白雲秋上にはね打かハし 同恋みとりなるひとつ草とそ

龍田河錦をりかく 同恋かりこもの思ひみたれて

春同たてハきゆる氷の 同恋玉くしけあけハ君か名

偽同四とおもふものから 同恋山しろのよとのわかこも

山の井のあさき心も102ウ

第十九 短哥

あふ事のまれなる色におもひそめ

以上十四首

一恋部あやめもしらぬと云巻頭より始て、吉野の河のよしや世中と終
たる所、善甚悪甚かゝハらす、正直にもあつからぬ所の義也、是身
を安する所也、一切如此可觀

一真名序撰喜之事 書写のあやまり也、只かな序のことく可心得と云

一廿卷の内作者なきハ、読人不知の心也、今上の御への哥に作者ある
ハ、当御代を賞翫の心なり

此の集表裏の哥のうち103オ

一桜花とくちりぬとも 此哥ハ後の世をかけたる、朋友・夫婦もうつろ
ふとなれば、すさましく冬の氷・夏の火にむかふかことき世のさま
を風する也

(一行分空白)

口伝なれと、恋中の事なれハ恋の中に書之

一日をりの日の事口伝云日下也、本たる上代に五月五日右近馬場へ内
侍所を下奉て、騎射の事有之、中古よりなかりけるにや、日ハ右近

ハ六日、左近ハ五日也、然共当流相伝共二五日也、三条右府公敦公

当流に御入有歟、則無相違よしの仰候と云

一あまのかるもに住虫、此哥ハ二条後の哥也、此集には直子入改名あ
りけるなるへし、此哥ハ物語に、藏103ウにこめてしほり給時の哥也、

此哥をよめる事、二条の後のふるまひよろしからぬ事のみありしに、

かへりみる心なく過しを、爰にて我から也、世をはうらみしと思か

へす事ありかたきにや、されハこの集に二条后とのみ入きたれるに、

此哥はかりを別に后をのする事、貫之か骨肉そとなり、されはこの

哥此集の中にも、肝心する所侍るとそ、此集ハ是道を専随一也、又

典侍と入事も其故あるへしや、されは此哥ハ一部の大意也、非を悔

る外に道になきこそ知は、非聖始也と云事是也、尤以可思所也、

猶可受師説

一大方八月をもめてし 此哥ハ政道にも、生死菩提にも104オ世をわたる道
にも一切にわたるへしとそ

一 ちはやふる宇治の橋守 道を学人たとひ天生の心あり共、其一代又劫をつまぬをハ不用不堪なりとも、長したらんを可仰由の教也

一 大あらしの森の下草 大荒木ハ一心表也、仏教にも玉舎城と云を、玉即心王舎即五蘊と釈したれば、一心のたとへ也、大荒城ハ御陵也、哥の心は先王のめくみをうけたると云義也、それも老ぬれハ、駒もすさめすハ、無心を云、無心の心自然なり、自然にその人のとハぬ也、かる人もなしハ、態ともとハぬ也、先王のめくみに長ある者は、自然にわざともとハぬをも心にかかけず、無事にて先王の「めくみの所を信思である」と也、森の下草ハ上の露を請て生長すれば、是にたとへたる也、此義俊成卿説

一 光なき谷にハ春も 世のめくみのいたらぬよし也、春をはめくみの方へとる物なれハかく云也、彼ハ失のことハリなれば、それにあつからぬをたのしむ心にや、不如無好事只無為の境界を可思よしにや

一 おもへとも猶うとまれぬ 春の霞をハよき人に取也、道ある人の又さやうの人のあらんに、我方へくる人の余の方へゆけハ、是をうとむをいましむるにや、諸道に此ことハりを可思にや

一 ことならばおもハすとやハ 理を明非をすなほに其事「事」に当て、人にしたかふへくハ、やかてしたかひ、人を万不然と思ハ、やかて云も放たて、そのことハりを一切に物をきゝすして、ありふるまゝに乱を引也、當時たゝ是のみにや

一 おもへとも思はずとのみ 道にハ又これもよろしからず、君の世をめぐみ臣の君をおもふ事如此にてハたゝ取心なり

一 もろこしの 大方思立道も、その程あるへきことなるを、あまりなるまで造作をし、人をも身をもくるしむる心也、なる事にてても、百

姓のくるしみあらは、如何ましておもひはかるへき事にや」

一 身は捨つ 仏法にていはゝ、身ハすてつとハ世界にあつからぬ捨身の上なり、心といふは無生なれば、つゐに此心にとゝまる物もなく、さはる物もなし、爰をつゐにハいかゝなるとしてへく思所、即造作と成なり、されはいかなるとしてへくはふらさしといへる也、心を師とするゆへに、りんゑも出くるにこそ、又云五大躰ハ捨つとも、心は金剛不壊の心なり

以上表裏哥四十八首之内大概聞書二載、少ゝ爰に注す

第廿卷事

一 おほなほひ大直とかけり、大字ハ古にあたる心也、天照大神の古の正をよほして、直となる義也、此大直「又人との直を云にあらす、またハ君の正也、直ハ我等人に君のめくみの事にや、是ハめにみえすして、其直をよほす也、草木のみとりになるも、更に其氣ハみえねとも、自然にそのめくみをえたることし、さて此哥ハ当代の御世のはしめの哥也、これを神武といふ義もあり、猶当代とぞ可尋之

一 あたらしき 此哥ハ受禪の時の哥也 神武兩代可尋之、心ハ君位につき給也、天下をたなこゝろに入給へきたのしみののはしめなり、此たのしみといふは、無事の道をたのしむなり、大道に帰る義也、是則尤王道至極也、此たのしみを千年を兼てと云也、「あたらしき年常の年始にあらす、猶可尋之

一 第廿卷之事 此卷ハ一段有子細事なり、十九卷雜躰も余集にハかはれる、殊此卷は王道神道を兼てあみたる卷也、此卷をは天真といふ也、黄門云与日月俱懸鬼神争奥文選短慮非取及云、文選注云、明始日月深始鬼神是天真之文也、上と賀申にも、君を析心得とも、ま

さしく君を祈心ハ此卷也、王者に道ハ爰にあらはるゝ也、いかんとなれば、日神の御代より天の日次を請て、天子即位して新年の御こくをもつて、手つから身つから供して、天神地祇を祭せ給ふ¹⁰⁷大嘗会の事あり、神閑ハ日神、岩戸を出給ひし佳端を移して、ひるめの神をおろしたてまつりて、舞曲をそうして、天下安全の宝祚を祈義なり、これ三国に勝たる道也、是王道肝心也、王道神道哥徳にあらはる、されハ哥も天真独朗之道也

一大哥所此国の名を用なり

一大直日直なる心也、神の御名に大直日と侍るも、直の義也、天照大神の御心を学ひうつす、天子の御心を大直日と云也、君臣の君をあらかめたてまつるも、又君の直をうつす心なり

一かそふれハとまらぬ物を年といひて今年はいたく老そしにける¹⁰⁷一をしてくるや難波のみつに焼塩のからくも我ハ老にける哉

一老らくのこむとしりせハ門さしてなしと答てあはさらましを

対愚是ハ哥の表を云

けふにあすよとかそへゆけとも、日月ハとまることもなくて、昼夜をふるに、ますく老身となると云心なり、年を利となすらへたり、此時は年といへは利也けりと也

対賢

一切如昨夢、依之所の一念ハ、雖経劫不可改の由なり、哥ハ常の序哥、からく老たるよしをいはんため也、かゝらしとハ、こゝろにハさも思はぬ事のいたり成する所¹⁰⁸の詞也、打任てハ、いたりてと云心斗也

一切唯心に極の由なり

無義以之為義

表裏共同上

口伝云

前に三首かけるハ、惣別に書出せる所也

一対愚と云ハ、をろかなる心をいひ、大賢といふは、おもひ返してさとの所をいへるよし也

一依之所の一念は劫をふとも、不可改とハ、何事も昨日夢のことしと思ふ一念の事也、其理をえたる念慮を云、あらたまるへからすとハ、りん多すまじきの心なり¹⁰⁸

一からしとハ、心にハさもおもはぬ事のいたり成する所の詞なり、とは人の老となる心也、爰を弁さとする心を教ぬる義也、されは一切唯身、心にはまるとハ云給へる也

一無義以之為義とハ、非其愚者に云へからざるの心也、大かた此三首、上に聞ゆる哥なれば、させる義なしと云へきの心也

一身是三足なと申事ハ、おかしき古今の注ニ申事に、他流の義と思取へく候、只当社三神の事にて殊勝之事

一題号に正直と云事、此二字を尺に申して、不中正と云を曲して、不曲を直と云といへり、中ハ平生人¹⁰⁹の云中には、非長短方円にもわかれ、青黄赤白黒にもよらぬ物を、中と云也、是か正に当也、是ハ自性におなし曲て、不曲とハ物に随ても不曲を云也

したかハぬは、かへりて不直也、甘巻に弓の所に同之、弓は隨心位ハ直の心也、是にて道ハそたつ物也、心に真実の直あれハ、何とも随か道なり、是まことの直也、たとへハ春の花雲に似れば、雲にハあらずといはんハ、不直なり、如此露を玉とも浪を雪ともみるハ、

まかりてまからぬ心なり、此正直古今の二字によくあたれる、古ハ言語及所心の至所ニあらず、今ハ当意の万法也、可工夫^{10ウ}」

一 号題之事 安子伝

古 文武 柿本 正内

今 延喜 貫之 直外

一 哥躰 名其

幽玄^{行雲} 長高^{高山} 有心^{物袋} 麗^{外直} 事可然^{秀逸} 面白^{一興} 拉鬼^{精力}

正直 松 竹 澄海 此四躰八十躰にわたるへし、といへり

一至極躰と云に口伝あり、古人様と申也

一 景曲躰・写古躰と云あり、写古をハ存直躰によす、景曲をは面白躰に

よす、条と沙汰あり^{110オ}」

一 号題之事 道曉伝

一 直子事作哥後作者也云、是を余所にハ^{アキマツ}亭子と書て、此一首に

のみ如此書事、以道之重事なり

又一部土台也、伊勢物語万物根源と成と云も、此一首ゆへなり

一 哥道ハ和也、和ハ無為也、身には正直を持、是を道躰といふ

一 春部哥、山ふかみ人もすさめぬハ、道に叶也、里とをみハ、作のう

た也^{110ウ}」

一 此集根源ハ直子の哥也

一 三代宗匠の内定家卿を為肝心

一 三代集見様 後撰古の後と云初の義也、又云義勢あり、古ハ末と云

事なし、如何後といはん所詮万を、ひて後とす、可用之、此集ハ哥

の面をうつくしく、義を取也

一 拾遺事 両字有、多義なり、尺教等入間、如此可用此、故に心得らる、哥をは、心得むつかしきをハ、打捨をく也と云、両集の抄と心得也

一 古今は入立て可見也、有如此三代集見振替也、天照大神は陰陽和合神也、陰非陰陽非陽^{111オ}古今奉当天照大神

一 廿卷之内伊勢哥と云事 東哥之内に入事、東海道ハ伊勢よりはしま

る間入、前後は此廿卷の部立なきによる也、一部之内に部立ある所

もあり、又なき所もある也

一 神書^{本和語}あをうな原に天のとほこをさし下し給て、此下つそこに国な

からんとて、さくり給、したる露かたまりと云、あをうな原

とハ陰の義也、天のとほことハ、陽の形なり、陰陽和合時之一起本無

明一念也、爰より自五蘊建立して、色と造作にあつる者也と云^{111ウ}」

一 よしや世中の哥にて、あやめもしらぬきくの白露を、かへりしる心

有之、思ひさとるへし

一 新古今撰給なんとて、千五百番の哥合御沙汰ありし事ハ、古今以前

寛平御時、道にすかせ給と哥合なとありき、又人々に哥めしける其

例とそ

一 入ほかと異風の哥の、猶めつらしくせんとて、する事に侍る也、難

波江に生るのみかハをしなへてとよあし原も霜枯にけり、かやうの

類也、近哥なれと、書之と云、あはれひかなし^む御国忌但現に

ハみこつきと書也、おつるもみちは^は真せいをくらさん

一 此一帖歌道之極秘、口授授唯授一人重事也^{112オ}」

一 頼常浅才 愚昧問題筆舌事難斗、両神冥助者也

一 十代道長翁平朝臣在判

(六行分空白)
「¹¹²」
ウ